

山崎郷土叢

No. 82
5. 9. 10
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

奥播磨の製鉄史 たたらへの解明 1

上
山
勝

はじめに

鉄は文明の発展に大きな役割を果たしてきた。日本史をふりか
えてみても、弥生時代の木製農耕具の製作に鉄器を用いたあと
がみられ、古墳の出土品にも鉄具がみられる。古代豪族の権力抗
争には鉄器の掌握があったであろうし、中世の庄園経済を支えた
のも鉄製品であった。中世末から近世にかけて武家時代には鉄製
武器、馬具等の掌握がこれまた大きな課題であり、近代工業社会
では製鉄業の進展が近代工業の発達と比例したといっても過言で
はない。このように製鉄は文明のバロメーターともいわれている
が、その歴史、とりわけ古代、中世の製鉄史については不明な点、
未解明な点が多い。

目次

① 奥播磨の製鉄史 たたらへの解明 1	上山 勝	1
② 山崎町梵鐘集成 — 金屋村 鋳物師 長谷川氏を中心にして —	片山 昭悟	16
③ 宍粟郷土研究会の発足史	志水 豊章	28
④ 明治維新の話 (4)	堀口 春夫	34
⑤ 御普請願上帳 (尼崎藩領庄屋文書)	久保 寅夫	38
⑥ 春の旅行記	垣口 正信	41
⑦ 与位高尾遺跡の発掘	町 教 委	43
⑧ 事務局だより		45

考古学、古代史研究はめざましいものがあるが製鉄の始期につ
いては今日なお不明である。八世紀に編纂された「播磨風土記」
に、「鉄(まがね)を生ず」との記述はあるが、それがどこで、どの
ような方法でなされたかもわかっていない。

本稿ではこれらの解明に少しでも役だち、日本の技術史、文化
史の進展に資することができればと思ひ稿を草した。

幸い先達の宇野正碓先生が長年全国的立場から研究をすすめて
くださり奥播磨のたたらも広く研究者の注目するところとなつて

いる。

千種町出身の鳥羽弘毅・村上絃揚両先生も新しい事実も発掘、究明くださり年々日本の製鉄史の解明に大きく寄与されているところである。これら諸先輩の研究も借りながら、筆者の持つ資料をとりあえず整理することとした。改めて今日の研究も加え「播磨学」の一貫として先賢の力を借りて稿を書き改めたいと切念している。

一、古代製鉄の記録

岡山県、鳥取県に接する兵庫県宍粟郡、佐用郡北一帯は、古くから製鉄が盛んで、八世紀に著された「播磨風土記」の「宍粟郡(しさわごうり 現宍粟郡)」の条「柏野里 敷草村(現千種町)敷草為神座 故日敷草 此村有山 南方去十里許有沢二町許 此沢生菅 笠最好 生栂杉栗黄蓮黒葛等 生鉄 住狼羆」(筆者訳 草を敷き神座とした。故に敷草村といった。この村に山があり、十里ばかり南に二町ばかりの沢がある。この沢には菅が生じ、笠を作るのに適している。栂や杉や栗や黄蓮や黒葛などが生え、鉄へまがねを生ず。狼や熊が住んでいる。)とあり、隣郡の「讃容郡(現佐用郡)」の条にも「鹿放山号鹿庭山々四面有十二谷 皆生鉄也」(山に鹿が住んでおり鹿庭山という。山の四面に十二の谷があり、皆鉄を生ず。)と、鉄を生じた記述がある。

十世紀の「観智院本銘尽」にも、宍粟郡に刀鍛冶が住み細身の刀を鍛えた記録がある。

十四世紀、鎌倉末期の作刀銘にも「備前国長船住左兵衛尉景光

進士三郎景政於播磨国宍粟郡三方西造之」とある。さらに十五世紀の「蔭涼軒日録」にも、足利義政が千草鉄二〇駄で作刀を命じた記録も残っている。

近世の製鉄跡は宍粟、佐用郡北一帯の各地で見られ、中でも千種町の天児屋鉄山、三室鉄山、高羅鉄山、荒尾鉄山などは、規模も大きく明治初期まで稼業していた。

このように奥播磨では、古代、中世、近世と、盛衰をたどりながらも連続と製鉄が行われていた。

二、砂鉄の採取

(1) 地質と砂鉄

中世から近世にかけて製鉄は、土砂の中から砂鉄を取りだし、木炭で加熱して製造する方法で、これを鑪(たたら)ふきといった。近世に奥播磨で行われた製鉄法を資料に基づいて以下に述べる。奥播磨の宍粟郡北では、千種町、波賀町、一宮町などで操業された。

砂鉄はその取れる場所から山砂鉄、川砂鉄、浜

株式会社 安井書店

去粟郡山崎町山崎90
TEL山崎(0700)代

砂鉄にわけられるが、上質なのは山砂鉄であった。山砂鉄は更に二種類にわけられ、花崗岩、石英粗面岩などの酸性母岩から取れるものを真砂(まさ)砂鉄といい、けらすなわち鋼鉄を作るのに適した。一方安山岩、閃緑岩などの塩基性母岩から取れるものを赤目(あこめ)砂鉄といい、銑(すく)すなわち、いもの鉄を作るのに適した砂鉄であった。

宍粟郡北の地質図をみると、花崗岩、閃緑岩、石英粗面岩などの地層が多く、一部では赤目砂鉄も

採集されたが大部分真砂鉄であった。第一表でも比較されるところより含有鉄は多くマグネシウム、マンガン、チタニウムは含有量少なく鋼鉄用に適している。

ことに鑛操業の盛んだったのは中国山脈の尾根伝いで、千種、波賀町あたりを東の限界線とし、西へ岡山、鳥取、広島、島根へと带状に操業されていた。

(2) 砂鉄の採集

宍粟郡北で植林が行われだしたのは明治の中頃以後で、それ以前の前山は採草地と雑木林であった。真砂土と呼ばれる花崗岩や石

	採集地	Fe	SiO ₂	Al ₂ O ₃	MnO	MgO	TiO ₂
酸性岩	兵庫 千種 島根 郡	56.34	9.68	2.47	-	0.76	6.35
	島根 根石 郡	56.64	13.98	3.32	0.37	0.88	0.81
塩基性岩	大下 分毛 郡	54.11	0.46	2.60	0.82	2.75	17.38
	岩手 九戸 郡	54.20	6.38	1.88	0.42	3.85	12.58

第1表 砂鉄の成分 (新日鉄広畑工場分析)

英粗面岩の風化した土壌を見つけると草木や表土を取り除き、八〜十五人が一組となって「鉄砂師^{かんさじ}」の指導のもとに山腹を掘る。下部を掘り込むと上部の土は安定を失い一度に落ちる。それを「井手(水路)」へ入れ、土砂を流し土と砂鉄を選別する。上部の土が落ちる時逃げ遅れて犠牲者を出すこともあった。「七人洞^{うた}」などという地名も残っている。

採集地は部落共有の山が多く、採集時期は秋の彼岸から春の彼岸までであった。夏季に川へ泥水を流すと稲作に害を与えること、冬季稼業すれば農閑期で、農民の副業として採集できることなど



第1図 宍粟郡北鉄滓分布図

砂鉄のたまり具合や一日の稼量など次の記録から推定される。
 千種屋千控帳 元文二年(一七三七)

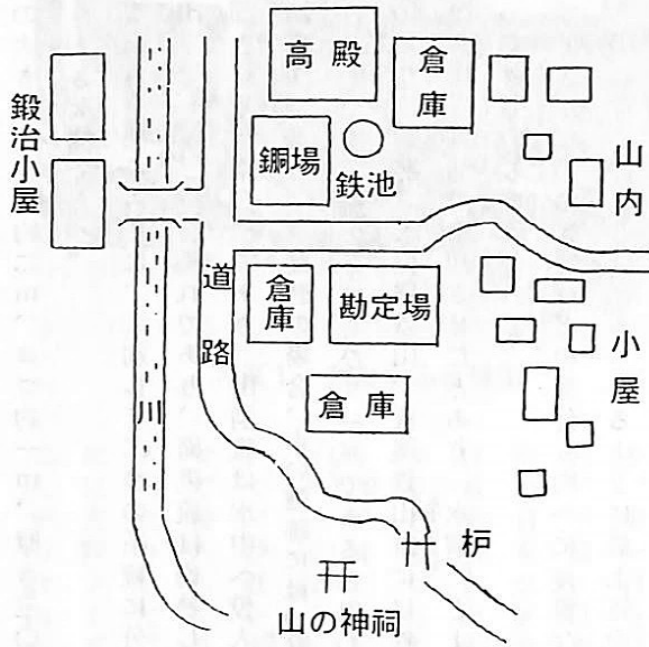
流田山 鉄砂量四匁四分(真砂一升二付) 一日十三人砂量百五
 十石砂鉄六太

高橋鉄砂三匁四分(真砂一升二付) 一日十三人二百七十五石

三、砂鉄の溶解

(1) 溶解作業(たたら吹き)

木炭の熱で砂鉄を溶解する作業を鋤(たたら)を吹くという。近世の中頃までは露天で鋤をふいたといわれるが、それ以後は、「高殿(たたら)」とよばれる笹ぶき屋根の建物の中で操業した。



第3図 天児屋鉄山見取図

奥播磨では数十か所の操業跡がみられるが、その一つ千種町の西河内天児屋鉄山を例にとると第3図のような配置で操業していた。

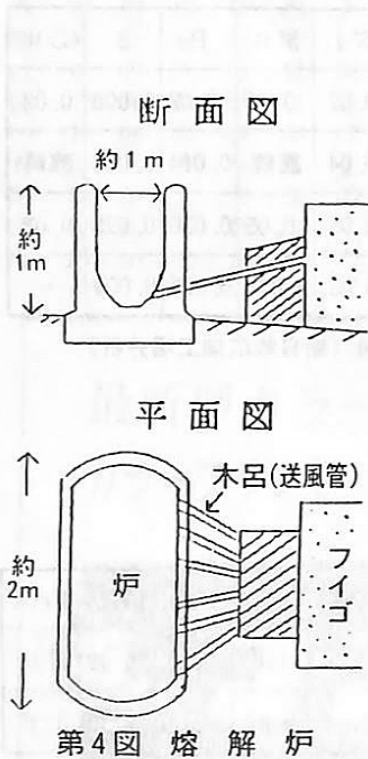
従業者は製鉄集団を作り、専業で操業した。

第4図にみられるような粘土作りの炉を熱し、木炭を入れては砂鉄を搬入し、交互にこれを繰り返す。

専門職が炉の炎の色を見ながら、約七十時間(三昼夜)操業する。砂鉄は加熱した炭火の中を下へおりながら炭化し炉の底に溶解してたまる。溶解物のうち上部は木炭滓やケイ酸その他不純物が多く、炉より流し出し棄てる。

これが鉄滓(てっさい)とよばれて野山に山積みして棄てられているのを今に見ることができ。

溶解物の下部すなわち底になる部分は、炭素含有量が多く、銹鉄(せんでつ)すなわち、いもの鉄として用いられるので、これまたまらないうちに炉の外へ流し出し鋼鉄用の塊と分離する。残った鋸(けら)は固まるのを待って炉をこわし塊を引き出す。



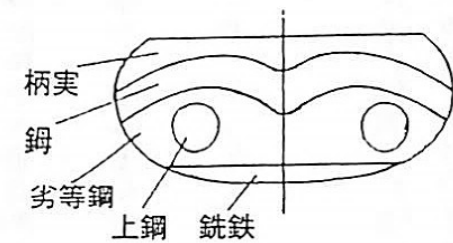
第4図 溶解炉

鋸(ボ)塊の大きさはタテ約二m、ヨコ約一m、厚さ三〇cm、重量二tという大きな塊である。

全国的な製鉄方法をみるに、大別して二つの系統に分けられ、備後流と出羽(いづは)流がそれぞれであり、備後流は灼熱した鋸塊を自然に冷却させる空冷方法であり、出羽流は水中へ投入し水で冷却する水冷方法である。奥播磨の場合、古い鑪跡には「鉄池(冷却池)」の跡はなく、備後流の系統をひく一派であると思われる。しかし時代の新しい鑪跡、天児屋鉄山、荒尾鉄山跡には鉄池跡もあり、老人の話にも鉄池で冷却させたとあり「水鋼」とよばれる水冷に変わってきていると思われる。

溶解してできた二tの鋸塊はどの部分も均一に良質なのかといえ、そうではなく、第5図にみられるように最上質の鋼は一部であった。

第2表の、生産した鋼鉄用鋼と塊の底部にできたもの用鉄(すく)の成分の比較をみると、炭素含有量に大きな差がある。普通鋼は炭素〇・四〜一・七%までをいい、それ以上を鉄鉄とよんでいる。千種の「玉鋼(たまはがね)」(鋸塊を小さく砕き、こぶし大にしたもの)の成分をみると、伯耆の鋼よりいくらか純度が低い。



第5図 鋸塊の断面図(窪田氏調査)

の磁鉄鉱の分析一覧である。鉄滓の方が鉄分は多く含有している。さて鑪で作り出された約二tのボ塊に要する原・燃料であるが、一度の操業に砂鉄約十五t、木炭約十五tを要した。近世末期には一鑪場で、年間数十回操業されており、その原燃料の砂鉄採集、木炭製造がいかに盛んであったか想像される。木炭十五tは三十五年生の雑木林約一haか

種別	C	Si	Mn	P	S	Cu
鋼 千種玉鋼	1.50	0.07	0.02	0.02	0.008	0.02
鉄 伯耆砥波鋼	1.33	0.04	痕跡	0.014	0.006	痕跡
鉄 千種内海鉦鉄	3.66	0.05	0.05	0.036	0.028	0.03
鉄 出雲菅谷鉦鉄	3.91	0.03	0.033	0.005	0.009	-

第2表 玉鋼と鉄の成分(新日鉄広畑工場分析)

種別	成分	化合水	Fe	SiO ₂	Al ₂ O ₃	P	S	Cu	Mn	CaO	MgO	FeO	Fe ₂ O ₃	FeO ₂
荒尾鉦山磁鉄鉦		1.05	42.71	18.38	13.47	0.007	0.014	0.001	3.35	1.30	126	23.01	35.48	0.18
千種鉦鉄滓		0.70	45.25	26.56	6.35	0.124	0.014	0.001	0.56	1.53	0.82	50.66	8.39	3.35

第3表 磁鉄鉦ならびに鉄滓成分(新日鉄広畑工場分析)

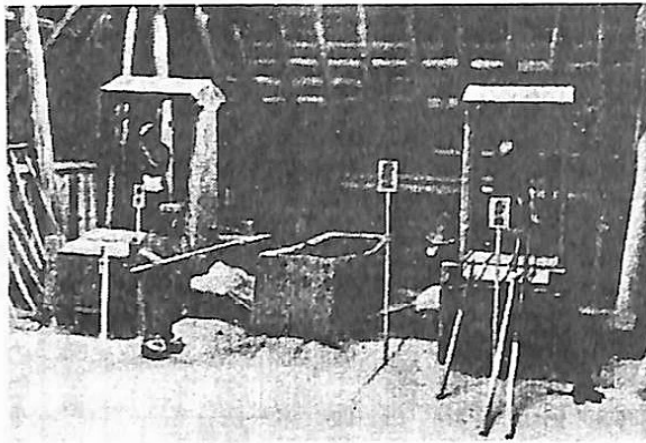


写真1 たたらふき模型

ら生産される量であるから、一鉄山が年間数十haの雑木林の木炭を要することになり、長年同一地で操業すると近辺の雑木林はなくなり、遠距離の木炭の運搬に困難をきたし、結局新しい地へ鑪場を移動させた。

(2) 一回の操業(一代)行程

一回の操業は三日間昼夜休みなく行われ、釜の底部に鉄塊(けら)がたまると釜を壊して外へ引き出し、次の釜を築いて新しい操業に入る。「釜つき」は一日で終わるので、一回の操業に要する日数は約四日で、これを「二代(ひとよ)」とよんだ。一か月約六〜七代の操業で年間約六十〜七十代稼業している。

操業は夜明けから始まり、第一日をコモリとよんだ。第二日をナカビ、第三日をクダリとよび、けらを引き出す朝を大クダリと名づけていた。

釜のまわりには技術職村下、炭坂、炭焚などがいて、砂鉄を火力にあわせて投入したり木炭を投入したりした。釜の両側には天秤フイゴがあり、二人ずつ計四人の番子と

よばれるフイゴふみがいて、フイゴは昼夜休みなくふまれた。このフイゴふみは、たたらふき作業の中でもっとも重労働とされた。第一日のコモリには溶解しやすい赤目(あこめ)とよばれる砂鉄が使われた。第二日第三日に使われる砂鉄は真砂(まさ)とよばれる砂鉄で鋼を作るのに適した砂鉄で、宍粟郡北の山々でこの真砂砂鉄がとれた。

赤目は塩基性母岩の風化した土の中にある砂鉄で、石英(SiO₂)の少ない安山岩、閃緑岩地帯の山から取られ、真砂は酸性母岩すなわち石英の多い花崗岩、石英粗面岩地帯の風化した土の中から採取された。

第一日のコモリも夕方頃になると釜に穴をあけ鉄滓(かなくそ)を少しずつ流し出す。これがいたるところで見られるななくそである。

村下、炭坂は釜の火力、炎の色を見ながら温度を調節したり砂鉄を入れたり、炭を入れたりするの、相当の経験とかが必要であり、失敗するとその鉄塊は使いものにな

最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop

コーエカメラ

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089

らず大きな損失になる。炎の色をみて砂鉄を投入する割合、投入する砂鉄の種類等秘伝であって、口伝えである。従って古文書には一切この技術は記していない。

高温の炎の色をたえず注意してみているため、視力を若くして失う村下、炭坂が多かった。砂鉄はスコップ状の鍬で十五〜二十分間隔で投入した。これも昼夜休みなしであるが交替して、高殿の片隅にもうけられた休憩所で仮睡をとった。

服装は黒のアツシを着、黒い布で覆面し火力を防いだ。ある時期には、藁でむしろのような前掛を作り、釜へ近づく時には前掛を上半身にかけ、火力を防いだ。

釜に入れる木炭も初日には気をくばり松炭を使い、ナカビ、クダリには何を使ってもよいとされた。ただし、カツラとスギとはたたら用炭には焼かなかつたと古文書にある。スギは用材として必要であったのだろう。カツラは伝説に、たたら守護神、金屋子神の神木とされていた。というのも炭材として不適であったと考えられる。

第二日のナカビ、第三日のクダリと時間が経過するにしたがい、砂鉄の投入も多くなり、間隔も五分おきぐらいになってくる。クダリの午後になると砂鉄の投入も終わり、釜の中のけらの固まるのを待ち、翌朝釜をこわしてけらの塊を引き出す。塊は二〜三日高殿の外で冷やされ、次に小さく砕かれる銅場へ運ばれる。けらの塊は厚さ三〇cm、長さ二m、幅一m、重量約二tの大きな塊である。

千種町下鷹巣の畑の中に厚さ約三〇cmで畳二枚ほどの鉄塊がうずもれているが、何かの原因で失敗し、砂鉄を炭化できなかったのであろう。

とにかく一回の操業に要する砂鉄は約十五t、木炭も十五tと言われる。そして製品は約二tである。当時一駄(約六十kg)が米価一石に相当したと記録されている。現在よりも米は貴重品で高価であった。従って、たたらふき一代に約四日を要し、高価な製品を作ったといえる。しかし、これらによる儲けは、鉄山を所有していた大商人と天領であったために運上銀(税金)として幕府へと流れた。

いずれにしろ、このような方法の操業は近世中期以後の比較的大規模なたたらふきであって、その当時、農民の副業的な小規模なたたらふきや、近世中期以前のたたらふきの方法などは現在のところまだ不明である。

(3) 炉の構築と地下構造

近世中期以後の製鉄場は、高殿(たたら)とよばれる第6図のような二〇m四方の建物(写真2参照)を建て、その中で操業した。晴雨に

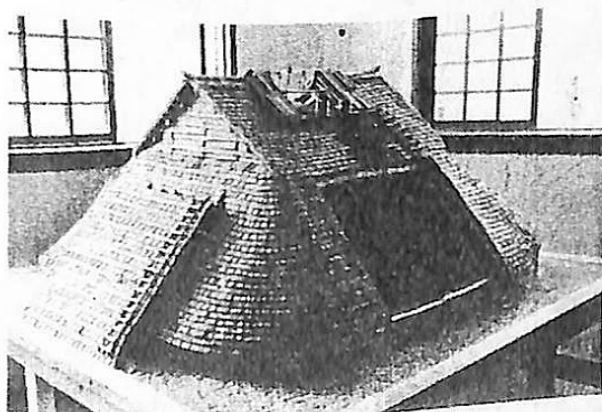
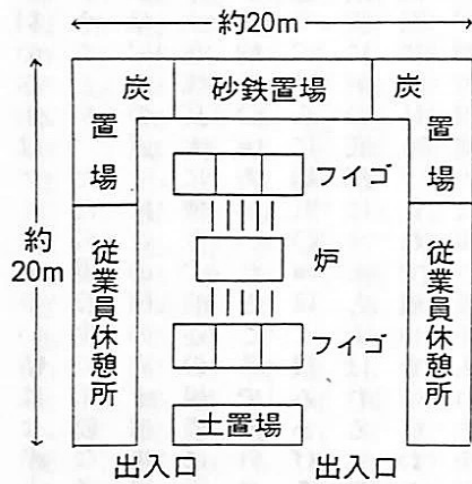
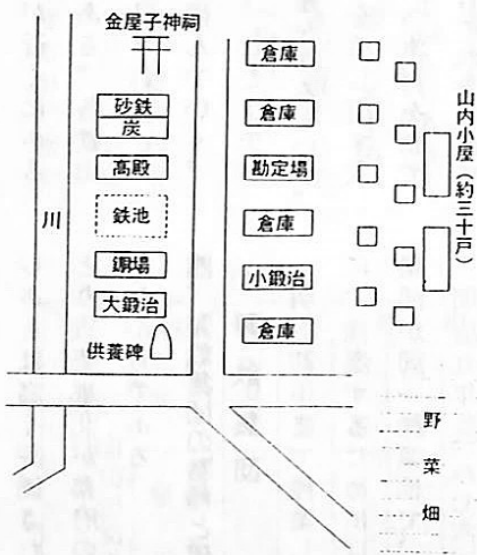


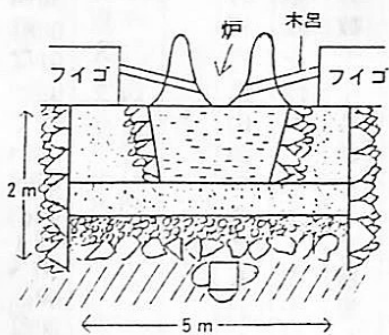
写真2 高殿の模型



第6図 高殿配置図



第7図 荒尾鉄山見取図



第8図 炉床断面図

かかわらず作業ができた。

砂鉄をとかず炉は、高殿の中央部に築かれた内のり、縦約二m、横約一m、高さ約一mの赤土を練って積みあげた箱状の炉で、この炉の築き方によって温度の上昇が左右されるので、きわめて慎重に、ていねいに築炉した。以下は村下の話の要約である。

新しい高殿で炉を築く時には、保温と地下の湿気を防ぐため、炉の真下にあたることを深く掘りおこして本床焼きをする。この作業は大仕掛けなもので昔から炉を築く際、炉底すなわち本床作りはその費用の大半を投ずるとまでいわれるぐらい完全にしなければ湿気を防ぎ、温度を高くあげることができないとした。

炉底約二mほど地下を掘りおこし暗渠排水溝を作る。その上に約三〇cm大の石を敷きつめ、さらに砂利を約三〇cm厚みに敷き、その上へ塩で練った真砂土を約五〇〜六〇cm叩きながらしめあげ

ていく。(第8図参照)

次にその上へ楢か檜の木炭を四〜五t積みあげ夜中に火をつける。翌朝早くに完全に炭火になっており、これを七〜八人で四〜五mの柄のついたシナイという道具で叩きしめる。叩く者を灰師はいしといい、山崎町平瀬氏蔵「千草屋手控帳」(天文二年)にその人夫賃等の記載がみられる。

灰師が炭火を叩き、炭が小さくなり、火が消えるまで叩きしめる。床面は六〇〜七〇cmあがってくる。さらにこの炭の層の上へまた炭を四〜五t置き同じことをくりかえす。そして最初掘った穴がうまるところまで床面をあげる。これで本床作りができたわけである。

次に鑪すなわち砂鉄溶解炉作りである。炉は一回一回壊して鉄塊を取り出すので、その度に築かれる。

材料の赤土はケイ素の多い特殊な赤土で、この土が近くにあり
ということが、たたら場設定の重要な条件の一つである。各鉄山
跡には、その近くにこの種の赤土採集場所が必ず発見される。

赤土を煉瓦大に練り、前述の規模に下から上へと積んでいく。

下から約五〇cmあがったところで内外の形を整える。ここまです
元竈で、さらに約五〇cmほど積みあげる。これを上竈を作るとい
う。

最後に炉の底部にユズとよばれる「のろ(鉄滓)」を流し出す穴
を両面につける。これで竈つきは終わり、炉の外側へ木材を立て
かけ、炉の内側へは炭や薪を入れ火をつけ、内外からこれを乾かす。

炉の乾燥をはじめて一昼夜ほど過ぎるとフイゴで送風管、木呂
(きろ)をさし、砂鉄を散布し製鉄の作業に入る。保温、防湿のた
めの本床作りは一度作るとその高殿で操業が行われなくなるまで
再び築かれることはない。しかし竈つきは年間数十回の鉄塊の製
造であるから、数十回は築炉しなければならぬことになる。

最初の炉で鉄塊が作られ、炉を壊して引き出されると、炉底は
二〇〜三〇cmも掘れる。そこで、毎回築炉する前にその補充をし
なければならぬ。炉底に約二〇tの薪炭材を積み火をつけ炭火
にし、掛矢やシナイで叩きしめる。これを「灰すらし」とよんだ。

早朝鉄塊を出すと、約三時間後には灰すらしを終え、築炉にか
かる。築炉に約二時間かかり、早速乾燥に入る。その後約一昼夜
で次の鉄塊の操業に入る。

ともあれ、産業構造変化の谷間におかれている現在の奥播磨を
おもう時、鉄の製造という重要産物で生活を拓いてきた先人のあ

しあとは高く評価されるべきであろう。江戸時代、私領の中でひ
とり宍粟郡北が幕府の直轄地天領になっていたのも、製鉄地であ
ったからである。

四、製鉄集団の職種と民俗

(1) 製鉄集団

明治初年まで操業した千種町の荒尾鉄山跡をみてもわかるよう
に、操業するためには大規模な施設を作り、三十〜五十戸の製鉄
集団が同一操業地で、十数年から数十年にわたって稼業した。

明治九年(一八七六)の戸籍簿によると、天兒屋鉄山五十三戸、
人員三百余人、三室鉄山
三十三戸、人員百数十人
となっており、荒尾鉄山
跡には従業者の住んだ山
内小屋跡は三十余戸を数
える。

遺跡から最大の施設を
持ったとみられる高羅鉄
山では、さらにそれ以上
の従業者を擁したと考え
られる。

このように近世中期以
後の鑪場は、数十の建物
を持つ事業場もしくは集



落であり、数十人から数百人の人達が生活を営んだ。鑪で作り出される鉄塊は大量の砂鉄と木炭を必要とし、操業地周辺の山野は広範囲にわたって砂鉄の採集と木炭製造のため伐採された。

砂鉄溶解炉では一度の操業で約2tの鋼の塊を製造し、それに要する原燃料は、砂鉄約15t、木炭約15tである。木炭15tは雑木林約1haから焼かれた量であって、一鑪場で年間数十回操業されたとして数十haの雑木林が必要となる。従って長年同一地で操業すると周辺の雑木林はなくなり、遠い地の木炭を運搬してこなければならず、運搬賃が高くつき、採算がとれなくなる。いきおい操業地を雑木林の多い地へ移動させることになる。

砂鉄はそれでも容積が小さく運搬しやすいため遠距離運搬も可能であるが、木炭は容積が大きく遠距離運搬はひきあわなかった。運搬距離の限界は砂鉄は七里(二八km)、木炭は三里(一二km)で、「鉄砂七里に炭三里」ということばが残っている。

古代、中世においては薪や柴をたき製鉄したと記録に残っており、木炭で操業されるようになったのは近世になってからであろう。木炭も用途によって焼き方も異なり、鑪用は黒炭(くろずみ)といって、「山子(やまご)」とよばれる専門職の炭焼きが焼く、半焼の煙の出るような木炭で、炭がまも一度に三百俵(約四〇五t)も焼ける大がまで、各地にその跡がみられる。

鍛冶用の炭は小炭といって、農民が副業で焼いたり、雇われて焼いたりした。

周辺の炭木がなくなれば他の地へ操業地を移動させるが、数十

年もたてば元の操業地周辺に炭木が繁り、再び元の鑪場へ帰ってきて操業をしている。

年代	鉄山	千種町					波賀町				一宮町						
		天兒屋	三室	市ノ谷	高羅	内海	鷹巣	鍵掛山	赤西山	音水	齊木鉄口	広路山	阿舍利	椴木	溝谷	都多	富士野
1700																	
10	享保																
20																	
30																	
40																	
1750	元寛文																
60																	
70																	
80																	
1800	天明																
10																	
20																	
30																	
1850	安政																
60																	
70																	
80																	
1900																	

第4表 近世主要鑪場推定操業期間

(宇野 正碓氏作表)

鑪場に残る従業者の墓石銘や、且那寺千種町の西方寺、千草の西蓮寺、波賀町の満願寺、一宮町の實際寺などの過去帳から操業期間を推定すると第4表のようになる。

主要鑪場の操業期間は次のように推定される。

天兒屋鉄山

- 一・宝歴十年(一七六〇)―明和三年(一七六六)約六年間
- 二・享和元年(一八〇一)―天保三年(一八三二)約三十年間
- 三・安政三年(一八五六)―明治十八年(一八八五)約三十年間

高羅鉄山

- 一・天明四年(一七八四)―寛政十二年(一八〇〇)約二十年間
- 二・天保四年(一八三二)―安政二年(一八五五)約二十年間

三室鉄山

- 一・寛保三年(一七四三)―宝歴四年(一七五四)約十年間
- 二・明和六年(一七六九)―安永五年(一七七六)約七年間

(2) 職種と作業内容

製鉄集団はその作業内容から次の四つの系列に仕事はわかれ、それぞれ職種により厳しい職階制が作られていた。技術的職業は世襲制で代々その職業を継いだ。

① 鉄砂流し(かんな流し、砂鉄採取作業)

鉄砂師 (かんなじ)

土砂を流し砂鉄を取る作業の総監督者を言う。鉄砂師のもとで働いた作業員は、多くは農閑期の農民であり、かんな流しは副業としての農民のよき収入源であった。

② たたら吹き(砂鉄溶解作業)

村下 (むらげ)

砂鉄溶解作業を支配し、溶解作業の総責任者であった。村下の技術により製鉄の良否が決定した。溶解炉の炎の色、熱、光などから判断し、数種の砂鉄を使いわけ、炉の中へ搬入した。

その秘訣は口伝えで記録には見られない。砂鉄や炭の搬入は副技術者等が作業し、村下は指図のみであった。代官所から派遣された役人の手代や経営者の執務する元小屋とよばれる勘定場へ自由に入出りできたのも村下のみで、住居も元小屋の近くにあり、たたら吹きでは最も要職とされた。

炭坂 (すさか)

副技術者で村下を助けた。

炭焚 (すたき)

技術見習者で、溶解炉

に炭や砂鉄を入れた。

土掘 (つちほり)

溶解炉を築く赤土を掘った。この赤土の選別は困難な作業で、良質の赤土(ケイ素の多い土)でなければ高温で長時間操業ができない。従って、こ



の仕事には熟練した老人があたった。

内番子 (うちばんこ)

溶解炉の温度をあげるため風を送るファイゴを踏む労働者を言う。

古くは大型の手押しファイゴであったが、近世後半には足踏みの天秤ファイゴになり、二人ずつ対になって踏んだ。溶解作業は昼夜連続で操業、従って夜寝る間もなく、重労働で嫁のきてもないと言われ、多くは独身者であった。

外番子 (そとばんこ) 諸雑用係であった。

③ たたら鍛冶(炉でできた鉄塊を二次加工する鍛冶)

大工 (だいく)

鍛冶大工ともいい、炉でできた鉄塊を鍛造し、鋼材を作る鍛冶職。鍛冶大工一人に向う槌四人が一組であった。

左下 (さげ)

鉄塊中炭素含有量の多い部分を再び溶かし、銑鉄すなわち、いものを作る鍛冶職。

手子 (てご) てまとりともいい、鍛冶の向う槌打ち。

④ たたら炭焼き(製鉄用炭焼き)

山子 (やまご)

山で木を切り木炭を焼く。山子 数人に頭取りが一人おり、頭取の指図に従って溶解炉用の黒炭を焼いた。

小炭伐 (こずみぎり)

鍛冶用の炭焼きで溶解炉用とは区別して焼いた。鍛冶用は白炭で、農民が副業としても焼いた。

百貫負 (ひゃっかんおい)

たたら用の炭がまは大きく炭材を背負ってかまに入った。百貫(約四〇〇kg)を背負う力持ちであった。

女子でも四十貫負、五十貫負といわれる老人もいた。

以上の製鉄従業者のうち、むらげ、だいく、さげ、かななじ職は敬称さんをつけた。技術的要職とされたのである。他の職種は呼びすてであった。

次は各地に残る鉄山労働歌であるが、これらの歌の中から作業内容や労働者の風俗、感情などもうかがえる。

かなな流し歌

行くぞみなされ、あの山越えて、鉄砂三里に、炭七里、むこに持つなら、かななじさんがよかるう、花の三月山住まい

わしが山には、こぶしに、つつじ、向う通るは何の花、山に咲くのは桜か椿、

あの娘みたいな、花はない



写真3 現存するかなな流し(島根県)

鍛冶歌

おれは横槌鉄焼いてたたき、かかは餅焼いてほんたたく／四十過ぎての、親方の意見、彼岸過ぎての麦の肥／男持つなら、大工さんか、さげさん、炭焼きさんは灰まぶれ

男持つなら、大工さんか、さげさん、たたら番子にゃ子はなかる男持つなら、大工さんか、さげさん、たたら仕事は村下さま
歌のかやしは、一度でよかる、二度のかやしは、くどござる

(3) 鉄山信仰

古代信仰は自然物崇拜であって、鉄を作る火もその対象となつた。火は生活を豊かにする反面魔物でもあった。この荒れる火の魔をなだめ生活に利用するところに、火の神崇拜の思想がめばえ、荒神(こおじん)が生まれる。

大陸から陰陽五行説などが伝わり、金神(こんじん)が生まれ、金山荒神等、鉄山の守護神が生まれてくる。

古い時代、原始的なたたら吹きであったころの、小規模で転々と野山を移動して稼業していた時代には、荒神、金神、山の神等が鉄山信仰の対象となっていた。

東北地方ではたたら場に醜面の泥面を祀る風習があり、これらの名残りであろう。

関東の一地方には稲荷(いなり)を信仰した鉄山がある。鉄山信仰は地方により時代によりかなり異なった。また複雑な伝統を持つものもある。

近世に至っては、奥播磨など中国山脈の背陵地方では、金屋子

神(かなやごのかみ)が鉄山信仰の中心である。金屋子神についての由緒記に、島根県野義郡広瀬町、金屋子神社縁起がある。

「吾は播磨国志相郡岩鍋の地で鉄を作る技術を伝授し、吾は西方主護神なれば、西方におもむかんとて白鷺に乗り、天空を飛び出雲国野義の郡黒田に着き、桂(カツラ)の木の枝に天下りたたらを始める」とある。

注目しなければいけないのは、白鷺に乗り飛来したということである。やはり製鉄集団の漂泊と考えられる。

千種町天兒屋に残る伝説にも「天兒屋根命」(あめのこやねのみこと)が白鷺に乗って飛んできて桂の木にとまり、たたらを始めた。「天兒屋」はその神の名をとって名づけた。などがある。伝説であって史実と混同してはならない。しかし考えられることは、漂泊する製鉄集団による技術の伝播であり、桂の木が神木として伐採されなかったこと、すなわち桂の木はたたら用炭木としては不適であったのである。奥播磨のあちこちにこの老木を見ることができる。

千種町の荒尾山の奥に「カツラさん」とよばれる推定五〇〇〜六〇〇年の桂の老木があり、別名「カナヤゴさん」「ヤマノカミさん」とよび参詣する老人がある。千種町の内海の山際の田の中に、金屋子神の祠があり、祠の中の奉納札に美作国(岡山)の鉄山師等の名もみられ、相当遠方からの信仰者があったと考えられる。

島根県の金屋子神社縁起の播磨国志相郡岩鍋を千種町岩野辺と結びつけるのは早計であるが、その他の記録に播磨の名がたびたび

び出てくる。かつてかなりの交流、関係があったと考えられる。さて、金屋子神は男神か女神かであるが、地方により相異なり、女神とする地方が多いようである。奥播磨においても古老談によると、極力女の忌を嫌い、たたら場へは女を入れなかった。女と同宿した朝は、たとえ厳寒期でも川へ入って水ごおりをとらなければならなかった。

また、一説に、女性の象徴がタタラで最も聖なるホドコであり神聖視したためであるとも言われる。

千種町岩野辺、加治氏蔵掛軸に、上段に金屋子神、中段にタタラ場、下段に鍛冶場を描いたのがある。金屋子神は女装である。

タタラ場によっては金屋子化粧池をもつものもあり、女神とするのが多いようである。

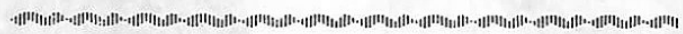
また、年二回、旧の三月の中の子の日、十月の初の子の日に金屋子祭りをした。たとえば荒尾鉄山の金屋子祭りには、村中の老若男女が鉄山場へ出かけ、酒肴をはじめ全員に大きなにぎり飯がふるまわれ、喰いほうだい飲みほうだいという盛況ぶりであったという。村の秋祭り以上に賑わったようである。

製鉄全盛期の金屋子信仰は、奥播磨の信仰史上大きな位置をしめるようである。

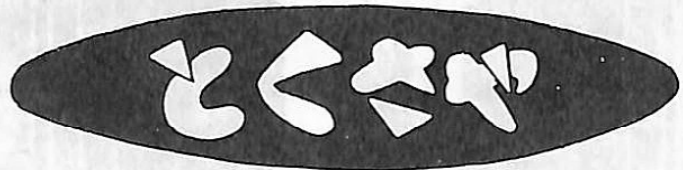
(以下次号につづく)

山崎町本町

金屋子神



創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)
☎(0790)62-1680代



山崎町梵鐘集成

— 金屋村鑄物師長谷川氏を中心にして —

片山昭悟

はじめに

金屋村鑄物師長谷川氏の梵鐘・喚鐘を中心にして山崎町内の寺院・神社にある梵鐘・喚鐘の調査を行っていたが、最近町内の梵鐘・喚鐘を新たに発見したものを含めて集成を試みる。

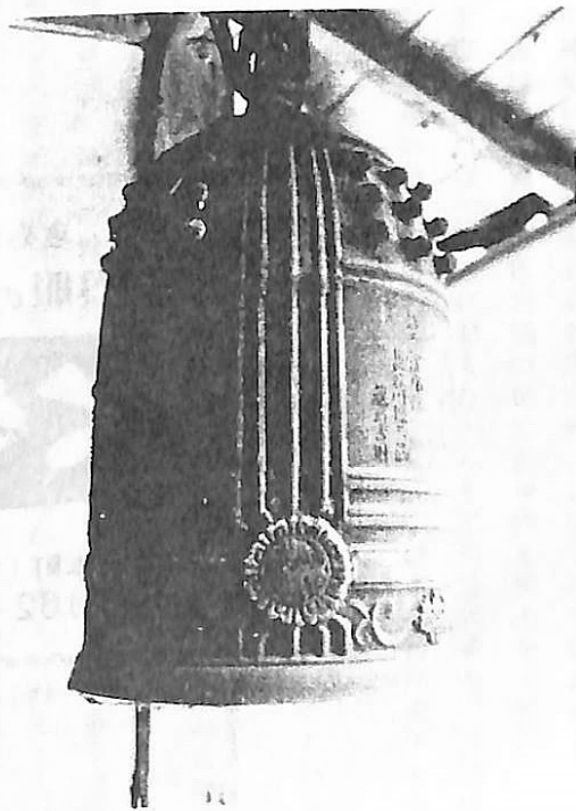
江戸時代の鐘について地区別(順不同)に集成する。ただし、年代治工などについてのみ概略を紹介する。

◇城下地区

金屋村(現在の金谷)には、江戸時代に鑄物師長谷川孫兵衛・長谷川五郎兵衛が存在していた。

村内政雄の「由緒鑄物師人名録」『東京国立博物館紀要七号』(一九六八)によると、文政十一年(一八二八)〜嘉永七年(一八五四)の「諸国鑄物師名寄記」などにみられる。

長谷川孫兵衛による鐘は、船元の一雲寺に「寛政元年(一七八九)酉曆十月九日 治工当郡住 長谷川孫兵衛藤原吉則」と陰刻される鐘は、現存している長谷川氏の中でも優秀である。



船元・一雲寺の鐘

春安の願行寺には「宝曆十二年(一七六二)壬午京三条和田信濃」の作で、喚鐘が現存している。

この鐘は、飛天像がみられ美しい鐘であり、長谷川氏の鐘とはやや異なるタイプである。

「播州完栗郡山崎」とあり、「播州完栗郡」は陽刻され、「山崎」は陰刻である。

御名の西光寺の梵鐘は、「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写し」によると、明暦四年(一六五八)とされる。

また、喚鐘は、鐘銘によると正徳二年(一七一二)であった。

段村には江戸時代の天保十一年(一八四〇)には、鑄物師「松井太郎大夫」が存在していた。

◇戸原地区

川戸字奥所にある道場元の喚鐘は、

「享和二(一八〇二)壬戌之冬

勅許御鑄物師當郡金屋住

長谷川氏藤原吉則作之」と陰刻されている。

現存する喚鐘で、「勅許御鑄物師」がみえる。

長谷川孫兵衛の作の中でも、「孫兵衛」を使用せず、「長谷川氏」と刻む。長谷川氏と刻むのは、郡内では、波賀町安賀満願寺・一宮町百千家満万福寺の喚鐘がある。



春安・願行寺の鐘



川戸・道場元の鐘



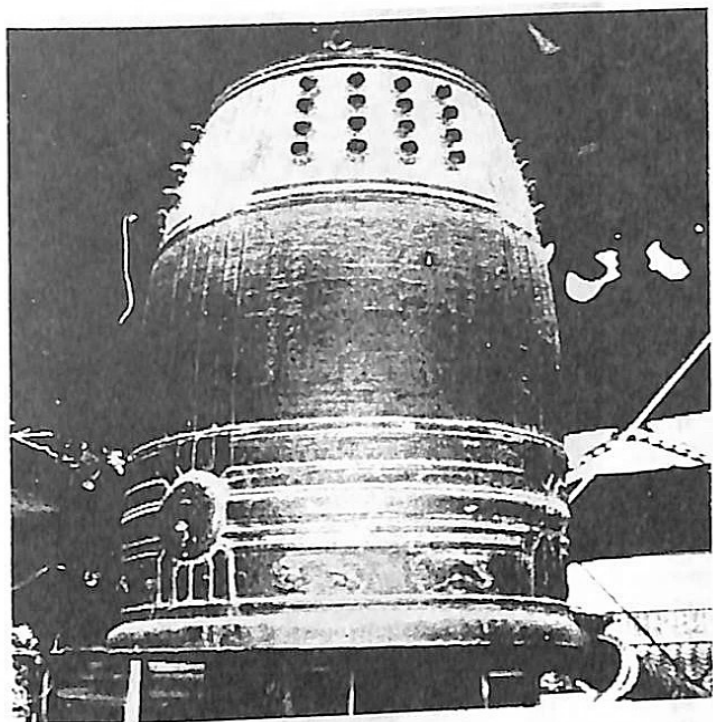
◇ 葛沢地区

葛沢には多くの梵鐘や喚鐘が現存している。

中野の桓武伊和神社の梵鐘は「宝暦十一年（一七六一）治工

長谷川孫兵衛藤原吉正・長谷川五良兵衛藤原家次」によって作られている。

『延喜式』神名帳「式内社」にみえる大倭物代主神社の梵鐘は『兵庫県神社誌』によると「天明三年（一七八三）治工 金屋邑住長谷川孫兵衛藤原吉則」の再鑄とされる。銘文から貞享二年（一六八五）の初鑄である。



中野・桓武伊和神社の鐘

徳王寺の梵鐘は、享保九年（一七二六）に「長谷川孫兵衛藤原吉信」

によるもので、喚鐘は文化十四年（一八一七）の「長谷川孫兵衛」の作であり、

「勅許御鑄物師

同郡住金屋村

長谷川孫兵衛藤原吉久」とある。

本堂南東隅に吊り下げられている。江戸時代における長谷川氏の現存する中では新しい部類である。

「長谷川孫兵衛」でありながら「藤原吉則」でなしに「藤原吉久」である。また、「勅許御鑄物師」と陰刻されている。

この鐘の龍頭は、二つの龍がみえる。水飢饉の時には川に沈ま



中野・徳王寺の鐘

せて、雨ごいの祭器として幾度か使用されたもので、地域の人々にはかけがえのない水神の対象にされていたのであろう。

上ノの平野にある観音堂(順礼堂)の喚鐘は、現存する。

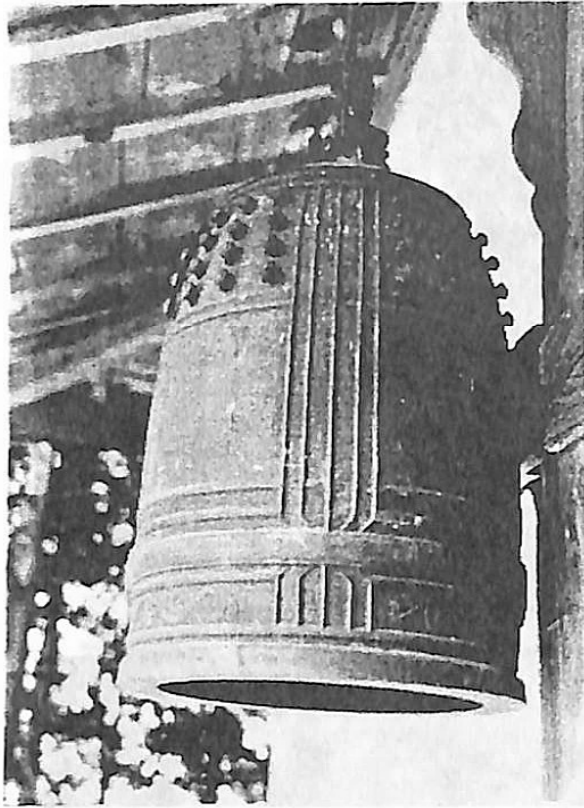
「明和七(一七七〇)庚寅歳二月吉日

播州宍粟郡金谷村住

大工 長谷川孫兵衛藤原吉正作之」と陰刻されている。

この鐘には、「大工」とある。長谷川孫兵衛は、当時鋳物師を統率していた真継家より、明和八年(一七七七)に「鋳物師許状」が発給されている。

明和八年(一七七七)には、岩上神社の鐘を長谷川氏は作っている。



上ノ・観音堂(順礼堂)の鐘

「明和八歳次卯春三月吉日

大工同国同郡金谷村住人

長谷川孫兵衛藤原吉正

” 五郎兵衛藤原家次」

小茅野の位王神社の梵鐘は、寛政九年(一七九七)三月再鋳のものであり現存している。

この梵鐘には、

「寛政九丁巳年三月再鋳之

勅許治工當郡住

長谷川孫兵衛藤原吉則」と陰刻されている。

寛政五年(一七九三)岸田村仏心寺の鐘の件で三条釜座との争論後には、長谷川氏の鐘は「勅許」を刻むのが多くみられる。

この鐘は、郡内のほとんどの鐘が戦争で供出されていく中で幸運にも残っているもので、長谷川氏の梵鐘の中では桓武伊和神社の鐘とともに優秀な作である。





小茅野・位王神社の鐘

中野の願立山極楽寺の喚鐘は、

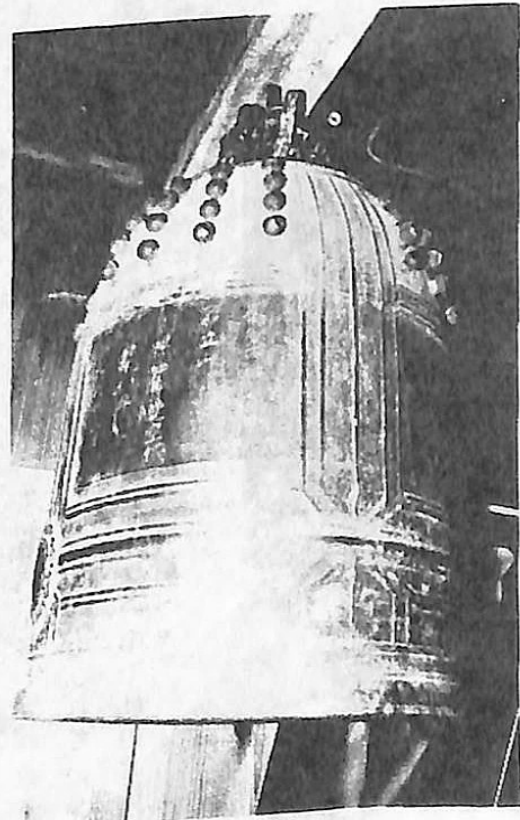
「元禄十年七月廿三日

出羽大掾

室町宗味作」と陰刻されている。

京室町の鋳物師であり、元禄十年（一六九七）の喚鐘は、郡内では一宮町福知の大徳寺の喚鐘（京三条和田信濃掾國次作）と同時期のものである。

梵鐘は鐘歴によると宝暦三年（一七五二）とある。



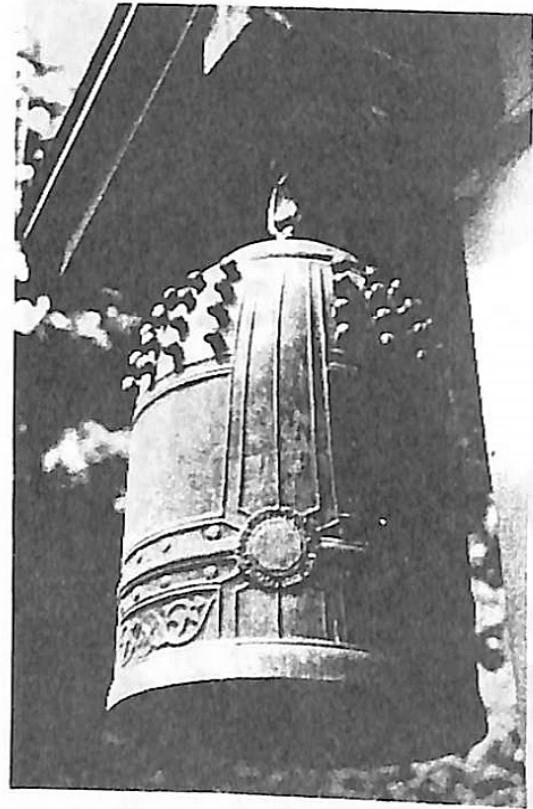
中野・極楽寺の鐘

また、中野字久住の光明庵の喚鐘は、安政二年（一八五五）二月の作である。

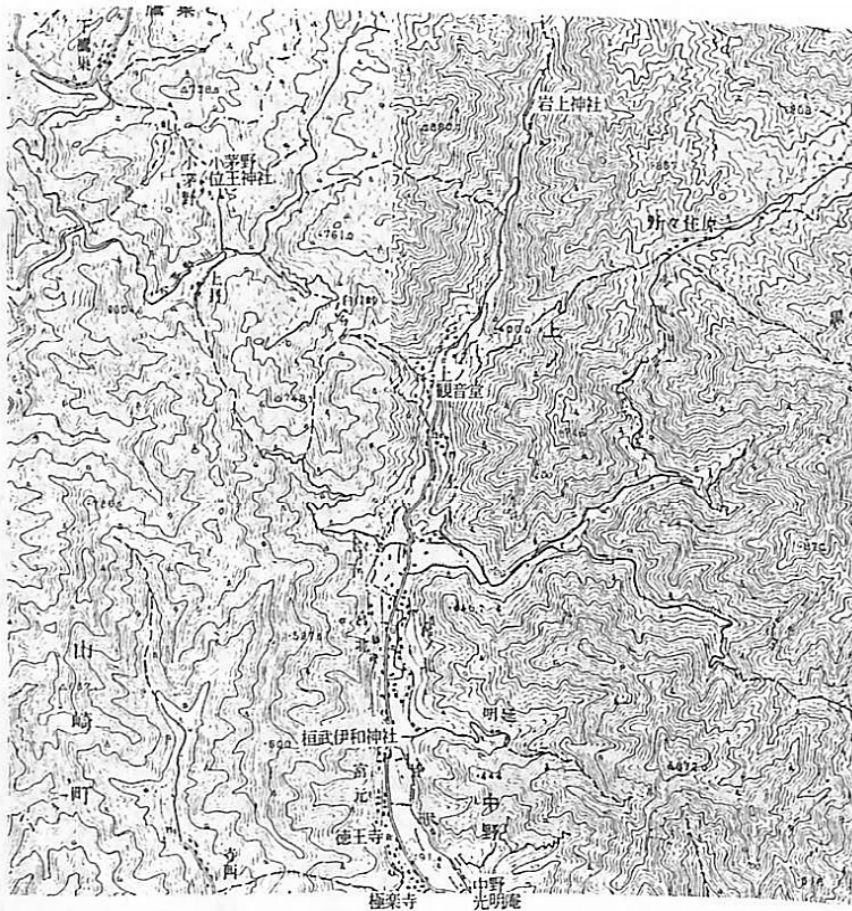
上牧谷の元有谷山菩提寺の喚鐘は「宝暦十一年（一七六一）治工高田住 中村弥右衛門」とあり、赤穂郡上郡の鋳物師であり、山崎では初出である。

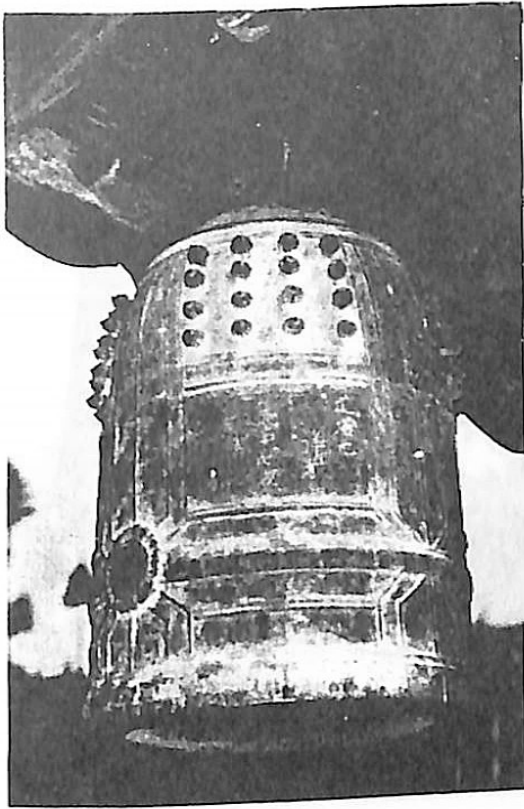


上牧谷・元有谷山菩提寺の鐘

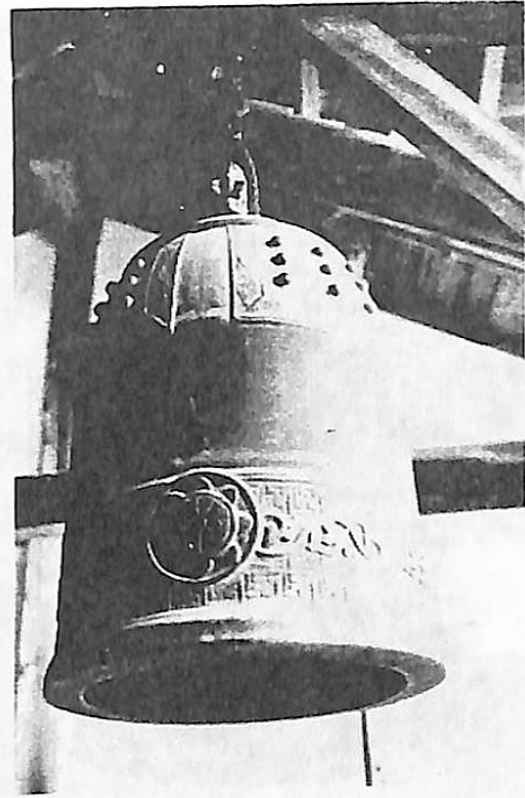


中野・光明庵の鐘

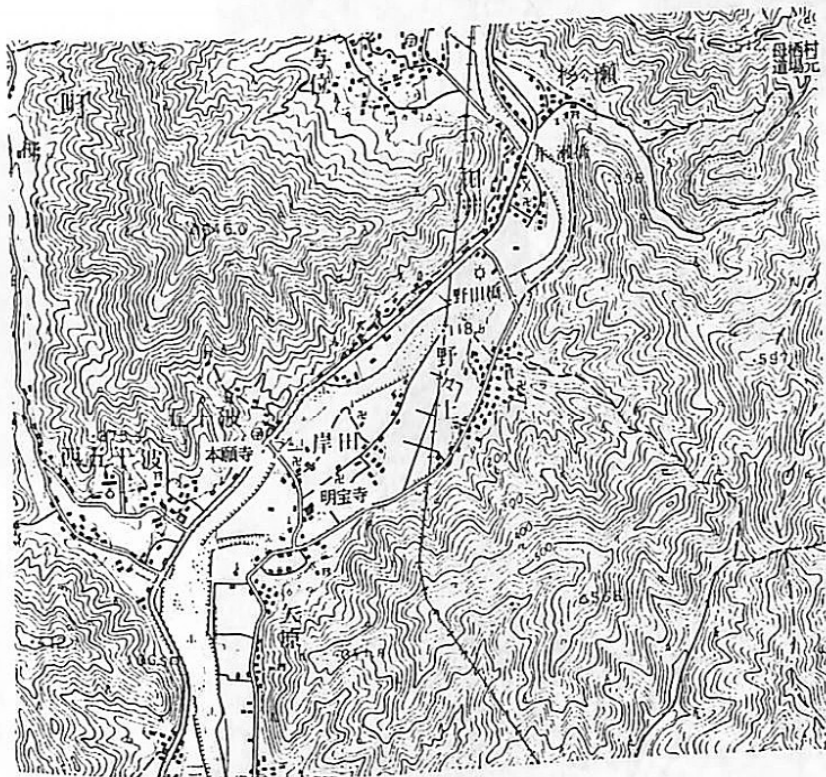




母栖村道場元の鐘



五十波・本源寺の鐘



◇ 神野地区

五十波本源寺の喚鐘は、正徳四年(一七一四)十一月の作であり、撞座がめずらしいタイプである。

母栖村道場元の喚鐘は、宝暦四年(一七五四)十月の作である。岸田明宝寺の鐘は、『山崎町史』によると海防のため安政元年(一八五四)大砲鑄造に差し出されている。
宇野正碓氏によると長谷川氏の作とされる。

◇山崎地区

明源寺の喚鐘は「享保六年（一七二一）小野六太夫」の鐘である。姫路京口住の鋳物師で、飛天像が美しい。

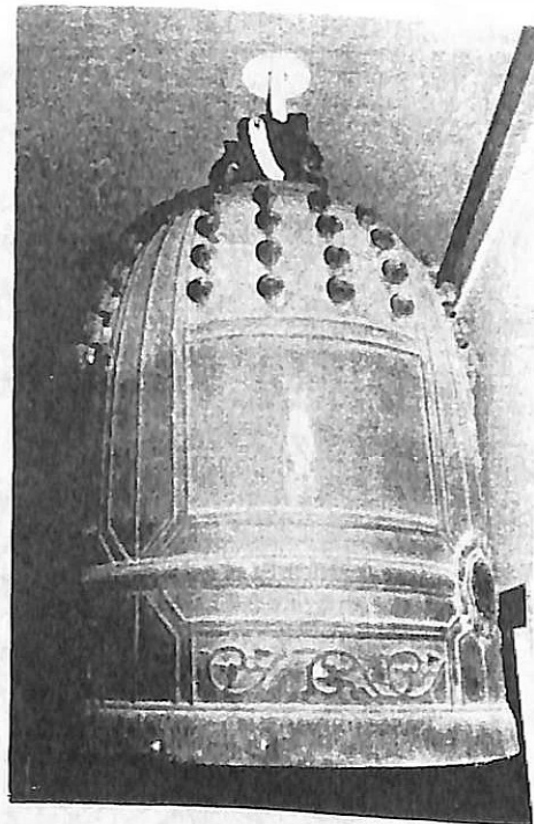
大雲寺の喚鐘は明和八年（一七七二）の鐘であり、喚鐘としては大きなタイプである。ただ、治工名はみられない。

なお、梵鐘は現存していないが、「鐘銘集」によると、元禄七年（一六九四）初鋳、享保五年（一七二〇）再鋳とされるものである。

妙勝寺の梵鐘は、安井俊二氏の調査によると、江戸時代の「天和」（一六八一〜一六八四）の鐘で、明治十三年の梵鐘銘から、安政の大砲に供出されていることがわかる。



山崎・明源寺の鐘



山崎・大雲寺の鐘

興国寺の梵鐘は、明治二十年のもので現存していないが、「鐘銘集」によると、正徳二年（一七一二）「洛陽三条釜座和田信濃大掾藤原国次」とされ、この鐘も三条釜座の鐘であったことがわかる。

光泉寺の梵鐘は、「宍粟郡内寺社ノ鐘々銘写し」によると、享保十五年（一七三〇）とされる。

また、喚鐘は「光泉寺供出記録」によると「宝永四（一七〇七）丁亥歳九月二十一日造之」とある。

青蓮寺の喚鐘は、「宝永三年（一七〇六）の作であり、治工はみあたらない。



山崎・青蓮寺の鐘

山崎八幡神社の梵鐘は、『兵庫県神社誌』によると、寛永十二年（一六三五）に初鑄され、延宝四年（一六七六） 宍粟前領主池田源政（政周力）の時に、長谷川孫兵衛尉藤原吉正によって改鑄され、貞享四年（一六八七）本多肥後守藤原政貞の時に「治工 長谷川五郎兵衛尉藤原家継、同孫兵衛尉藤原吉継」によって重鑄している。この鐘は戦争で現存していない。

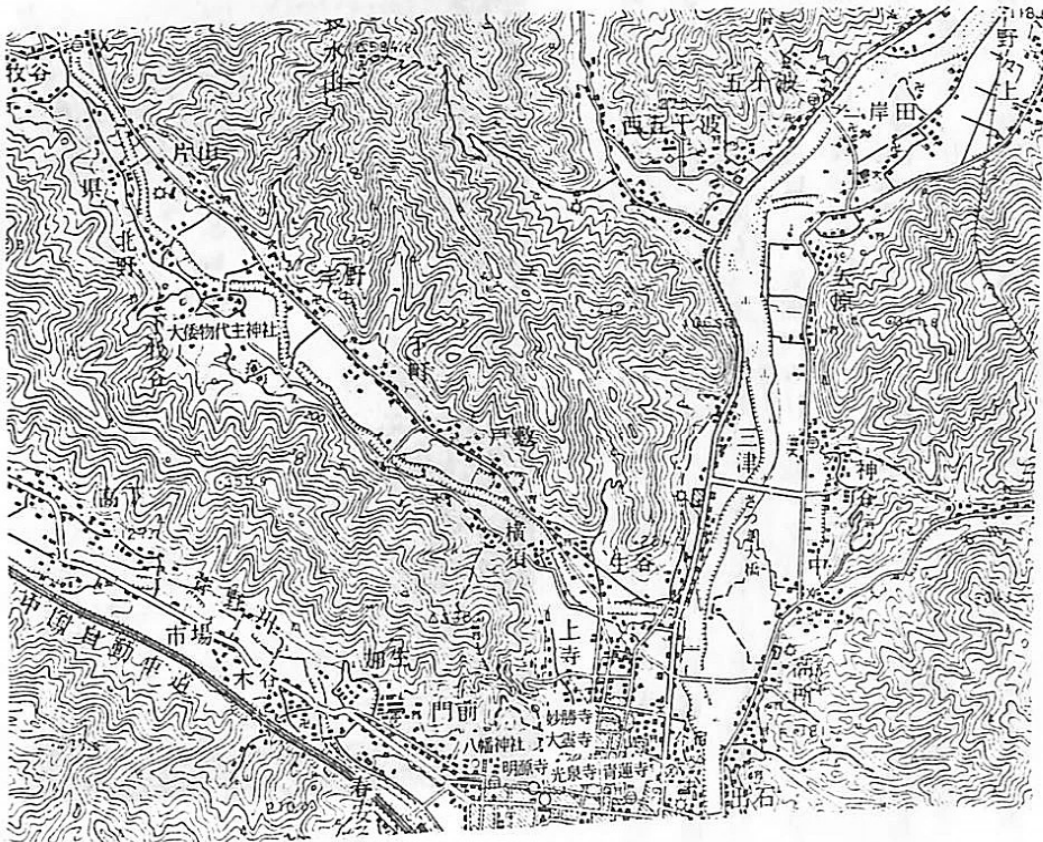
なお、片岡醇徳『宍粟郡誌』宝永五年（一七〇八）稿によると、

一、高拾合鐘突料

此高守護領の外門前村より収納す

一、擣鐘并鐘楼堂、前の郡主松平石見守殿造営、

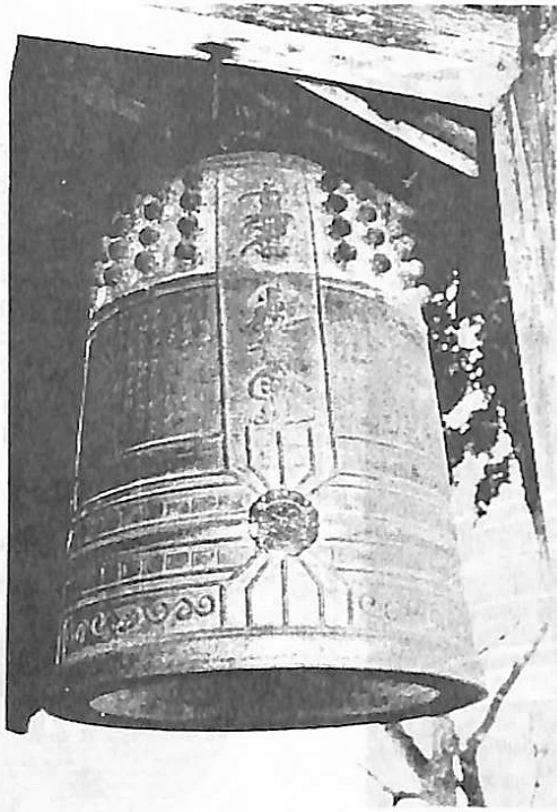
代々の守護修復 と八幡神社のことが記載されている。



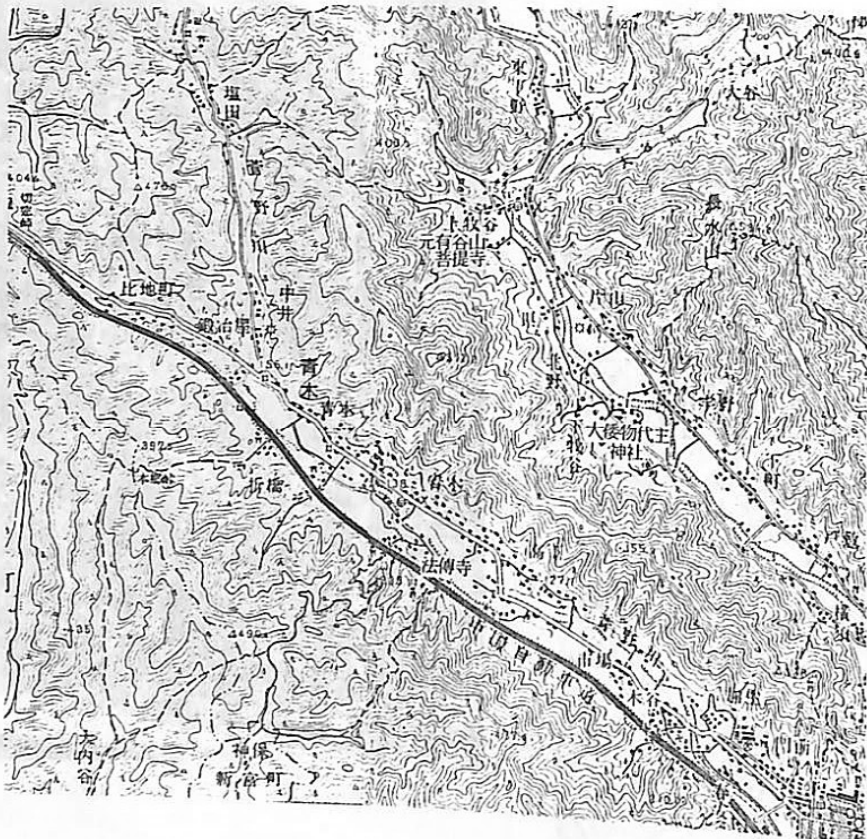
◇菅野地区

高下の法傳寺の鐘は、享保十七年（一七三二）初鑄、弘化四年（一八四七）二鑄、文久元年（一八六一）三鑄である。

鐘銘は、「長谷川孫兵衛 後見西新町藤原藤蔵 大工 丹州福知 山人 金屋源兵衛作之」と刻まれている。



高下・法傳寺の鐘



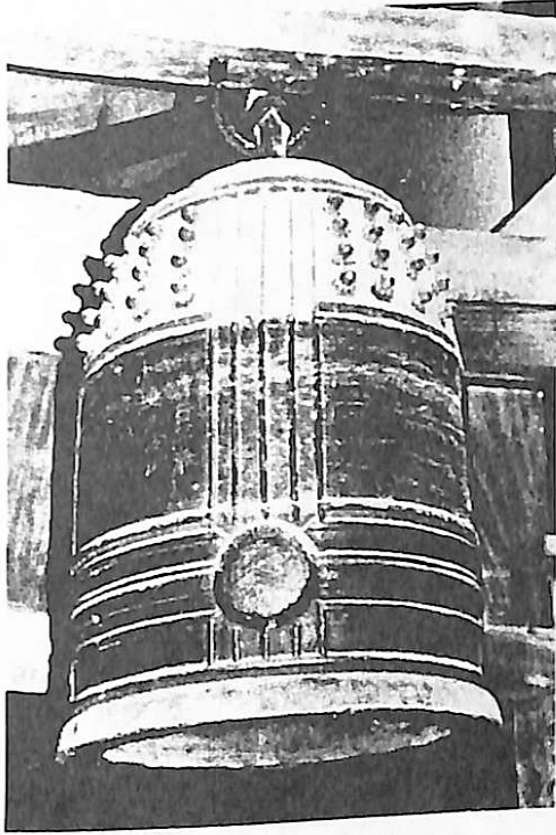
◇土万地区

大沢の円通庵喚鐘は、安永三年（一七七四）に「長谷川孫兵衛藤原吉正」が作っている。

「安永三年春甲午三月日

治工同國同郡金屋村

長谷川孫兵衛藤原吉正」



大沢・円通寺(円通庵)の鐘



まとめ

今回、山崎町内の江戸時代の梵鐘・喚鐘について、年代・冶工など概略を紹介するにとどめた。

なお、太平洋戦争で貴重な鐘が多く供出されている。山崎町内の梵鐘を考える上で重要であり、『兵庫県神社誌』『宍粟郡内寺社ノ鐘銘写し』安井俊二氏の「山崎町梵鐘銘写」より紹介した。

梵鐘集成にあたり、町内の寺院ならびに神社において一つ一つの鐘のいわれなど、くわしくご教示いただいた。

町内には、今回紹介できなかった鐘や未調査の鐘、明治・大正・昭和初期の鐘など、今後は宍粟郡内についても金屋村鋳物師長谷川氏を中心にして梵鐘集成を行っていききたい。



宍粟職士研究会の発行

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL⑥20036

宍粟郷土研究会の発足史

志 水 豊 章

山崎郷土研究会の前身である宍粟郷土研究会は、今から六〇年前の昭和八年（一九三三）一月一二日に発足した。そして、会報『しゝさは』を昭和一二年六月に第七輯を送り出して、その活動を停止してしまった。その後、昭和二二年（一九四七）に再発足の総会が山崎高等女学校の講堂で会員約七〇名の参集のうえ催された。この再発足も長くは続かず、二四年八月発行の雑誌『志左波』第二巻第三号（通巻第七号）の刊行とともに中断してしまつた。しかし、昭和三三年（一九五八）三月二一日に関係者の努力によって再発足し、昭和四四年の総会に於いて今まで長く続いた「宍粟郷土研究会」の名称を「山崎郷土研究会」と改称し、現在にいたっている。

発足して六〇年、再発足して三五年の歳月が流れたのを機会に、研究会の歴史をまとめる必要があるのではないかと考え、発行されてきた会報をもとに、その歩みについてまとめてみた。

第一次宍粟郷土研究会の発足

宍粟郷土研究会が発足する契機は、昭和七年九月に『大阪毎日新聞』や『神戸新聞』に儒学者である山崎闇齋の逝去二五〇周年

にあたり、贈位陞叙の懇請が各界より斎藤首相になされた旨の記事に闇齋の出身地として山崎が付記されていた。このことは地元の有識者を驚かすとともに、郷土の顕彰の必要性を痛感させ、儒学者山崎闇齋と出身地「山崎」の関係を明らかにすべく、安原源十郎・尾崎孝三郎・南部耿介・春名荒太郎・山下勢太郎（元山崎町長）・長澤米蔵（山崎小学校長）が集まり共同調査にあたることになった。そして、一月一日に山崎教育会主催で山崎闇齋逝去二五〇年祭が行なわれ、鹿沢の闇齋の屋敷跡と伝える地に闇齋神社創建の企がなされはじめた。

また、この時期には神

戸在住の郷土史家松下敏が調査のため、度々宍粟郡を訪れており、松下氏の強い研究会設立の斡旋などとともに、眞沢の桓武伊和神社の境内（裏山）の古墳が発見され、陵墓騒ぎが起るなど郷土史に対する関心が高まりつつあった。

研究会の設立は、発起人である山崎町長前野修二の名で町内の有識者五

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします

百神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)
TEL (0790) 62-7588
FAX (0790) 62-7589

○余名に案内状を配り、八年一月一二日午後七時半より役場会議室で創立に関する懇談会が開催された。参集された人数は四〇余名で、前野町長より研究会設立に対する主旨説明があり、会員の対象を「本会ハ郷土史及一般郷土研究ニ趣味ヲ有スル同好者並ニ之レガ賛助者ヲ以テ組織ス（第二条）」とし、目的を「郷土ニ於ケル史的事項ヲ調査研究シ其顕著ナルモノノ維持保存ニ努ムルヲ以テ目的トス（第三条）」との会則を定めている。そして、会の事務局を山崎町役場内に置くこととなった。

また、役員として会長に前野修二を推薦し、副会長に安原源十郎、幹事に尾崎孝三郎・長澤米蔵・南部耿介・安田喜一郎・安井寅一・志水富次・村上彰治（後日）の幹事会で春名荒太郎・前野愛吉の両氏が追加）が委嘱された。

研究会設立直後の一月三一日に開かれた役員会では、会計事務を安原幹事に、会報編輯事務を安田幹事に委嘱すること、会員数百名を目標として勧誘することなどが決め

表装全般

…古いものを大切に…

表具師 **松本永春堂**

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62-0122

られている。会員数は半年後の昭和八年七月二〇日現在で一〇五名（会報第一輯掲載）に達していることから、かなりの反響があったものと推測される。

宍粟郷土研究会が結成される昭和初期の兵庫県下に於ける郷土史研究団体は、まさに盛況を極めていた。中でも、最も早く結成された「神戸史談会」（明治三八年七月結成）は福原潜次郎らを中心に機関誌『兵庫史談』を大正一五年一月から毎月発行していた。神戸史談会に少し遅れて、明治四〇年一二月に「姫路史談会」が設立された。この会は二年後の四二年二月に「播磨史談会」と改称し、会長の矢内正夫を中心に会報を昭和一〇年の第二四号まで発行していた。その後、大正五年一二月に「明石史談会」、同一五年には赤松啓介が「摂津史談会」を結成する。

昭和に入ると、一一年に小林楓村が「矢野史談会」を、一三年ごろには「加西史談会」、一六年には「龍野史談会」が活動を開始している。

一方、従来の文献史料を中心とした郡単位の史談会組織から脱却して、民俗学や考古学を学ぶ浅田芳朗・直良信夫・鎌谷木三次・太田陸郎・島田清らの若手研究者の活躍が始まった。その先駆は浅田芳朗で、昭和五年九月に東京で「播磨文化研究会」を設立し、雑誌『播磨文化資料』を創刊した。その後、「播磨郷土研究同友会」「兵庫民俗学会」「播磨文化学会」「郷土文化社」「近畿民俗学会」「兵庫県郷土研究会」が組織されるが、昭和一二年になると戦時色が色濃く覆いはじめ、若手研究者への召集が始ま

り研究活動は逼寒していった。

このような状況下で宍粟郡郷土研究会は組織され、活版印刷された会報『しゝさは』が発行されていった。会報編輯事務を担当する安田喜一郎（青風）は大正一四年四月、龍野中学校から山崎高等女学校に転任してきた教諭であった。第一輯は昭和八年八月一五日に発行されたが、安田は編集の感想を編輯後記の中で「会報の編輯を、お引き受けはしたものの原稿がとんとあつまらないので手のつけ様もなかった。そのうち春が過ぎて、夏が来た、夏も土用近くなって、熬りつけるやうな空梅雨の後の酷暑が毎日づく」と編集の苦勞を述べている。会報はその後、第二輯（九年二月二〇日発行）、第三輯（九年七月一五日発行）、第四輯（九年十一月一五日発行）、第五輯（一〇年七月一日発行）、第六輯（一一年七月一日発行）、第七輯（一二年六月五日発行）と四年間に七冊刊行されたが、編集責任者の安田が昭和一二年に山崎を離れ、大阪の相愛高等女学校に赴任し、豊中に移った後は、途絶えてしまった。

実質の活動期間は四年という短いものとなってしまうが、この間に実地踏査会を五回、講演会を一〇回、昭和一〇年一月には第一回郷土展覧会を、翌年一二月の郡更正共進会では郷土史料展を担当するなど、戦時色が生活全般に忍び寄るこの時期において活動がなされたことは、県下の研究団体としては特記されるものである。

その後の活動は不明であるが、山崎闇齋の命日祭には会員が集

まりささやかながらも例会が続けられていたという。また、昭和一四年一月一六日山崎闇齋先生旧蹟保有会が設立されているので、研究会の念願であった山崎闇齋屋敷跡の購入がなされたものと推測される。そして、一六年一月には闇齋屋敷跡の一角に「山崎闇齋先生祖考の碑」が建てられている。

第二次宍粟郷土研究会の発足

戦後、各地で文化団体が無数に結成され、連絡団体として文化協会や文化連盟といったものが組織されるようになった。こうした各地の動きと呼応して

山崎町でも昭和二〇年一月一七日に「山崎振興会」が結成され、その中に「文化厚生」の部が設けられた。その後「山崎文化連盟」が組織され、宍粟郡内の文化団体の連絡協議機関が発足し、周囲の文化団体が次第に活発な活動をするようになった。また、赤穂郡矢野村の小林楓村は昭和二〇年一月にいち早く「西

HOME CENTER

アグロ

- 山崎店 0790-62-2434(代) 今宿129番地 0790-62-2434(代) 毎週火曜日 休
- 龍野店 0791-63-3226(代) 龍野市龍野町富永字田井屋敷1005-64番地 0791-63-3226(代) 毎週火曜日 休
- 野上店 07915-2-0703(代) 赤穂郡上郡山野里字南行波2398番地 07915-2-0703(代) 毎週火曜日 休
- 郡子店 0792-76-0018(代) 赤穂郡郡子町老原市川原39番地 0792-76-0018(代) 毎週火曜日 休
- 佐用店 0790-82-2001(代) 佐用郡佐用町門応寺86番地 0790-82-2001(代) 毎週火曜日 休

播史談会」を結成し、翌年二月には会報『西播史談会会報』を發行するなどの活動を再開した。

こうした状況のもとで、山崎高等女学校に勤める島田清は、校友会学芸部のなかに郷土班を創設し、考古学を導入した郷土研究会を組織した。そして、テスト用紙や反古になった紙を使って会報『鹿澤』を二〇年一月二日二十八日付けで創刊号を發行した。この会報は翌年二月一五日の第二号で終わっているが、新しい息吹を地域に与えたことと推察される。

こうした新しい動きに連動して、二二年になると、宍粟郷土研

究会の旧役員や新しい有志が協議して、世話人を設けて再発足の準備がおこなわれることになった。最初は遅くとも五月下旬に総会を開く予定であったが、予想以上に手間取り、六月一五日に発足総会が山崎高等女学校講堂で催されることとなった。総会には会員約七〇名の参集をえて、盛会に行なわれた。総会の冒頭に創立以来の会長である前

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790) 62-1190

野修二により、再発足をおこなうに至った経緯報告がなされ、前幹事の志水富次が一五年にわたる会の歴史と事業の概要が話された。会則は「郷土の自然と文化全般に亘って調査研究し、著名なものの顕彰保存に努めることを目的とする（第三条）」とうたいあげている。そのための事業として、(1)隔月一回例会を開き、会員の調査研究事項を発表すること。(2)毎年五月の例会を特に総会と定め、前年度の会報告を行うこと。(3)年四回、会誌『志左波』を發行して、会員研究の成果を掲載すること。(4)郷土資料を調査整理して、年一回『宍粟郷土叢書』を刊行すること。(5)春秋の二期に実地踏査会、又は見学会を催すこと。(6)必要に応じて展覧会を開き、又その道の権威者を招聘して講演会を開くことが会則として明示された。

また、新役員は名誉会長に村上彰治、会長に前野猛夫、副会長に安井俊二、幹事に松本広一・中村潔・栗山宗治・松本富治・和田秀男・猪尾睦男・前野勇・島田清が就任した。その後、総会の翌日に町役場で開かれた役員会で幹事に山口猛雄を担任することと、春名荒太郎・本篠猛二・大谷薫雄・大江興源・田中稔・壺坂操二・南部耿介・安井寅一・前野修二・小畑虎之助・小林善太郎・岸原徳四郎・岸本正一・志水寅次の一四名に顧問を委嘱することが決められた。

総会の後、記念講演として島田清による「宍粟郡文化活動史」と題して、江戸時代における学芸方面の足跡についての研究報告がなされた。また、総会に併行して催されていた「宍粟郡文化活動史料展覧会」もあり、参加者の目をなごませた。

宍粟郷土研究会が再発足したすぐあとの七月に、浅田芳朗は郷土文化学会を発展解消し「播磨郷土文化協会」を組織し、機関誌『播磨郷土文化』を翌二三年六月に創刊した。浅田は姫路を中心とする研究者を組織するとともに、播磨郷土文化協会を呼掛け団体として「兵庫県郷土研究連盟」の結成を、西宮史談会・神戸史談会・東播文化人クラブ・的形郷土学会及び青麦同人に提唱した。連盟の創立総会は二二年一〇月一二日に姫路で開催された。宍粟郷土研究会がこの連盟に加入したのは二四年四月二四日開催の第四回総会からである。この時、研究会を代表して島田が出席した。その席上で未加入の篠山史談会・西播史談会・龍野史談会の加盟勧誘が決議された。

その後、解散・休止により異動があるが、昭和二七年四月一日現在での連盟参加団体は青麦同人・有馬郡郷土文化協会・播磨郷土文化協会・神戸史談会・的形郷土学会・西宮史談会・大塩文化協会・多紀文化顕彰会・丹波史談会・東播文化人クラブの一〇団体である。その後、龍野史談会・兵庫民俗学会・姫路文化協会・北摂郷土史学会が参加したが、二八年四月一二日の第一二回総会を最後にして、立ち消えになってしまった。このことは、各団体の指導的立場の研究者が組織を越えて、二九年五月に発足する「兵庫史学会」（事務局・神戸大学文学部日本史研究室）へ吸収されていったことを物語っているのかも知れない。

このことは、県下の研究者を結集させた兵庫史学会の沈滞とともに各地で分散活動をよぎなくされている。県下の研究団体の

連絡協議会のような団体は現在に至っても組織化されることなく、「神戸史学会」がその役目を担っているのが現状であり、今日的課題でもある。

宍粟郷土研究会が再発足した戦後の県下の状況を長々と述べたが、このような雰囲気の中、研究会を主導していた島田清は「地方人の強みは、結局その地方々々の具体的な事実をはっきり掴んでいることにある。郷土を愛する心は歴史地理のみでなく、総べての研究の出発点となる。地方の方々は、こうした立場から各人自ら其の地方の伝統を調査され、その経て来た過程と理由とをはっきりされることが、

今後、進んで行く途を決する重要な基礎にならうと思う」と、郷土史研究の立場を『志左波』のなかで述べている。島田は戦前より浅田とともに研究活動をつづけており、播磨郷土文化協会の創立時よりの会員でもあり、宍粟郷土研究会との係わり方においても、その立場を明確にしている。

島田と宍粟郷土研究会



との関わりは、会則の第八条に「本会の事務所を山崎高等女学校に置く」とあることから、実質的な会務は島田がおこなっていたものと思われる。また、会誌『志左波』の奥付には「編輯・印刷・発行者・島田清」となっていることでもうかがえる。

会誌『志左波』の創刊は昭和二年八月一日付けで、謄写印刷されている。第二号は同年一〇月二〇日、第三号は二三年三月五日、第四号は同年五月二五日発行と年四回の刊行となっている。二年目の第二巻第一号（昭和二三年一〇月一〇日発行）からは活版印刷となっている。その後、第二巻第二号（昭和二四年二月二〇日発行）、第二巻第三号（昭和二四年八月二〇日発行）と出版された。

最終号となった第三号の途中で、編集者の島田は昭和二四年四月に山崎高等学校（山崎高等女学校は昭和二三年四月より新制高校となった）から兵庫県社会教育主事として転勤し、県下の史跡・国宝重要美術品等の調査・保存に当たる専任者となり、五年半の山崎での生

株式会社 安井書店

90山崎町山崎郡粟共
TEL山崎⑥0700(代)

活にピリオドをうった。島田自身は第三号の編後私記で「次号は第三巻一号として刊行する」と記しているが、果たされないままに終わった。しかし、島田が第二巻二号の編輯後記で述べてる「郷土研究会の機関誌として、郷土を研究した直接の論考や、その資料となるものを載せることは当然のことであり、又、どこの郷土雑誌でもやっている。『志左波』第一年の一号より四号までは、大体、こうした方針のもとに編輯し、刊行された。しかし、郷土研究会の事業には、郷土の人達がその土地に親しみをもち、その生活を楽しみ、更に進んで一層の向上を図るように努めることも忘れてはならぬ。郷土の研究も、結局は郷土人の生活を考えることとなくして存在するのではなく、郷土人の生活が如何なる変化、発展をしたかを究めて、将来への工夫と努力とを生み出すことにかゝっている」理念は現在でも色褪せていない。

島田が去ったあとの郷土研究会は、会報こそだせなかったが活動は続けられていた。その成果としては二七年七月に本多家古文書を調査して、目標を作成している。また、七月には兵庫県粟共地方事務所の発行で『粟共（粟共郡勢要覧）』が出版されている。その中には島田によって郡内の歴史がコンパクトにまとめられている。

この小稿をまとめるにあたって、今は亡き島田清氏の学恩を偲びつつ、先達の足跡をしのんでいます。

明治維新の話

(4)

堀 口 春 夫

明治二年正月の京都は、次ぎ次ぎと諸大名が天顔を拝さんと着京する、お供の侍や献上の荷物、御使者の往来で街は大混雑を呈していた。正月も半ば過ぎた頃には、東京遷都の噂が巷に聞かれ、いずれの諸藩も大名は随身の嘆願を願ひ出ている有様であった。そうした中に山崎藩本多肥前守忠明もある日弁事所より呼び出しが有り、太政大臣三條實美卿、岩倉具視卿、その他薩長の功臣達列座の中で尋問があった。忠明は此の機会こそと思ひ正式の御挨拶の後、「手前小藩では御座いますれども遷都のみぎりには何卒吾等にも御随身の程を御願ひ申し上げ奉ります」と申し上げた。「それには及ばぬ」と岩倉卿の御声がはねかえって来た、まるで頭にのるな！と言わんばかりの声であった、あつ！と思う瞬間、続いて薩摩の侍臣とおぼしき人物より、「事の序にお尋ねもはん：去る伏見鳥羽の合戦に將軍の膝元にておはんの藩旗が翻がえっていたとの報告がごわすが、「——」「これは如何なる所存でござわすか：」「ハハアッ：」忠明は体中の血がいきに頭に昇ったような気がした。これは手厳しい、ややあって、「拙者の父肥後守は元大阪御定番の役柄にありましたれば、定番屋敷に残りまする在阪の家臣供が、国元の指令の届かぬうちにあやまって行動致し

たかに存じ上げます」「なる程：ではその後おいどん等薩摩の負傷兵が白旗を上げて淀川を下降する折柄、貴藩等幕府の混成軍団が土提の上よりこれを盛んに射撃致したる振るまい、吾等の監察属より逐一報告されてあるが、手向いせぬ者を攻撃されるとはちと理不尽なる振舞いではござはんか：」「ハハア：まことにもって汗顔の至りに御座ります：」肥前守は恐れ入って言葉に窮する折柄、岩倉卿より、「それはもう過ぎた事、過去の事をいままさら問いつめるはもうよいではおまへんかのう西郷どん、それより肥前殿、遷都にはおあしがたんというよってのう、随身の行列は極力少な目にする気でおります。それより費用としてお金の方を何んとかしてたもれ」、その言葉尻の終らぬうちに長州の侍臣より、「此度は御前会議の結果により万石以上の大名にはその知行高に比例して費用を抛出してもらう事になった。つまり、そこ許には一万両都合つけてもらいたい」「——」一万両と聞いて忠明は全身の血が一度に凍りつい


最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop

コーエカメラ

兵庫県山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089



たかの様な感じに打たれた、全く自失して返答が出来なかった、しばらくして岩倉卿は「そこ許のててごは大阪商人とも顔馴染もあること故、大阪御定番時代のよしみを通して何んとかしてたもれ」と重ねて言葉があった。「——」忠明は唯茫然として、家臣達がそれを聞いてさぞ驚く事であろう。其の臣の顔が頭に渦巻いて言葉が出なかった。一旦頭に昇った血が今度は次第に足元に下がって顔面は蒼白となつていった、一万両：そんな大金があるうはずがない、今の今まで何度も商人達に借りつくして来てようやくここまで来たのに、：忠明が返答に窮しているところへ側近の広沢真臣が「つまり、姫路侯には拾五万両、明石侯には八万両、青山殿には六万両、桜井殿には四万両と近畿の大名達へそれぞれ用立てる様に申し渡しちよる、そこもと一人では御座らんわ：即答は出来んじやろうがとくと考えろこちやのう」と長州なまりの声で言った。肥前守は返答なきままですぐとその場を引下がって行つたが、空間を歩いて



いる様で足が地につかなかつた。今聞いたばかりではすべて譜代の大名ばかりである。かつて幕府に忠誠を誓った者ばかりで戊辰の役に協力せず二股掛けた罰であろうか：「罰金か！ そうだ罰金だ」朝廷と幕府へ二股かけた罰だ、譜代の大名は自分一人ではないが：帰邸の馬上で幾分気が軽くなつた忠明は我が身を嘲笑う如くカラカラと自笑した。不案がる家臣を尻目にと鞭あてて早駆で帰邸した。忠明は帰邸と同時に重臣達を呼んで、今日の御所の趣を話し、早速この由を国元へも知らすべく用人山岸権内をして国元へ急報した。国元でも藩主肥後守忠隣はその責任の一端は自分にあると感じとって、藩主の座を長男忠明にゆずり自分は責任をとって隠居する事にし、朝廷に嘆願書を認めて、折返し尾関平蔵をして京屋敷の忠明のもとへ送つて来た。新藩主忠明は此の書状を御取次士木村筑後之介をして弁事所岩倉卿に差出した。翌日弁事所より肥前守忠明に出頭が命ぜられ、忠明が出頭するとすぐに岩倉卿が出て来て対応した、「肥前殿：肥後守殿御隠居の願ひ真であるか：」「ハイ、戊辰の節の責任をとりまして御座ります」「何に責任とな、それには及ばぬものを：肥後守殿にはこれから大阪にて働いてもらおうと思つていたのにのう、そなたのてて御はいつたい幾くつになられた」。ハイ五十六歳に御座ります。「さ様か：まだそれ程の歳でもあるまいにの：仮にそなたが新藩主として藩政を取りしきる、さすれば隠居の身の方が働きやすいかな：「ハイ」「しかし父上には持病が御座りまして：」「ほう：持病とはどの様な：」「痛風で御座います、膝の痛みが時折：」

「しかし動けぬと云う程でも御座るまい」「ハイ、典医に薬も頂いておりますし侍臣もいますから。」「そなたのでて御は若い時から二条城御城番や大阪御定番を長い間勤めておられたからのも、一度京の禁裏でもお会いした事がある、ようするにそなたのでて御の顔がほしいのや、大阪商人には顔がきくよっての…此の度新政府では太政官札発行所を御所より大阪に移し、京橋御門内に札座を設け、今までの定番大名達に太政官官吏として立働いてもらいたい、併し何分今の大阪商人は太政官札をてんで信用せんのでなあ、おあしを貸しよらん、そこで定番時代の顔と経験を生かして新政府の金融に便宣を計ってもらいたいのや…」「ハハアッ…」

岩倉卿はそこで一段声を落して密そやかに「例の一万両の抛出金のう、あれは表むきの立前、そこで父御にうんと働いてもらった出来ぬ話でも御座るまい」ホホホと、意味有りげに笑いをもらした。「のう肥前殿、左様そなたのでて御に伝えてたもれ…」

肥前守忠明は幾分気がほぐれた様な気がして、「此の時節柄御期待に添えるかどうかはわかりませんが、父上に左様お伝え申しませ」と言って引き下がった。これによって父の隠居は一応認められたが、病身の父が果して御期待通り勤められるかどうか気が掛りでならなかった。新藩主忠明は二月中旬になり東京遷都は予定通り実行に移されたのでこれを見送ったが、なかなかの大事である、すべてのお公卿衆の家族を初め家来衆も東京に移り住むのだから大移動である。武家の隨身は少ないが家財道具から身の廻りの書類荷物等に遷都の費用は莫大で、岩倉卿が心配するのも無理はな

かった、出来たばかりの新政府は全く金に窮していたのは事実であった、国元の忠隣も隠居とは名ばかり、これからは太政官官吏として新任務につくべく、元大阪勘定方勤務の藩士達を集めて大阪城京橋御門内御定番屋敷へとおもむいた。大阪に着いて見ると、元定番大名の顔ぶれが既に集っていた。江戸時代の定番大名は数名の者が月番交替で城の警備並に大阪城代の補佐を勤めていたのであるが、城の警備は此のたび南北の奉行所が一つに合体して大阪警察中央屯所として大手前定番屋敷に出来ていた。そして沢山の羅卒が城を警備していた（今の大阪府警の元である）。又此度は東京に太政官大蔵省が出

来新任の大蔵卿には薩摩の大久保利通が就き、大蔵大輔には長州の井上馨が就任し、太政官札の発行を大阪城の京橋門内に設けられた。つまり札座で（後に造幣局となるのである。）政治の東京、経済の大阪。と言う事になる。

一方新藩主忠明は二月中旬遷都を見送った後、暫く西京の警備に当たったが三月中には任をとかれて

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師

岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

新藩主として国元に帰って来た。しかし一万兩の拠出金については工面のし様がなかった。他の近畿の諸大名も皆同じ思いである、無い袖は振れない例え、領地を返上して版籍を奉還するしか手がなかった。姫路藩でも十五万兩もの大金の工面は出来るはずがなく播州では先ず率先して版籍奉還を申し出た。続いて明石藩も、尼崎藩も篠山藩も申し出た、山崎藩もこれに遅れじと版籍奉還を申し出た。新政府は計画通り望むところではあったが、さて膨大な土地がいっきに還元されて来てもすぐさまその処置にこまるので一応藩主を知藩事に任命して今まで通りの年貢の収納に当らせ、その米の現物を政府に納めるか、又は金納させようと考えた。明治二年の六月には全国の大名が皆版籍を奉還して知藩事の職名をもらった。しかし新政府も金に窮しているので年貢の高はいっこう軽くならず以前にも増して取立は厳しいものになり地方では百姓一揆が絶えなかった。一方新しく太政官官吏の役については肥後守忠隣も仕事は思う様にははかどらなかった、いくら旧幕時代の顔馴みであっても大阪商人は容易に信用しなかった、世の中の急変と太政官札とは言え不換紙幣である以上信用しないのがあたりまえであった、彼等は現物主義であり、大阪は特に銀本位の町で各店でも店先に斤量を設えて小つぶ銀貨から豆板銀に至るまで先づ目方を計って現物を取引する有様であったから、太政官の高官であろうと、顔馴染であろうと紙切れ一枚の証文では借金も現物の購入も出来なかった、今までに幕府の崩壊で踏み倒されて来た経験があるだけにそれは実に厳しいものであった。肥後

守忠隣の大坂元締めは家臣の松井正路であったがその配下の役人も一応は皆大政官官吏と言う肩書のもとに大阪商人の間を駆けずり廻ったが店先で体良くあしらわれ効果は無かった、彼等商人は生野銀山も石見銀山も今は新政府の物になったのだからいつ時も早く銀の貨幣を造るべきだと言う。併し政府はこれら銀山の採掘を三井や鴻ノ池などの豪商にまかせ、一貫して金を借りる仕組にしているから一般の商人が不満は元より何んとか天下一般六十余州に通ずる銀貨幣の鑄造を早くしてもらいたいのと沢山の嘆願書が太政官札発行所へ提出されていた。又兵庫、横浜などは外国が金本位である以上貿易は海外通貨のきく金貨の鑄造も嘆願されていた。これ等の嘆願書は政治の中心東京の大蔵省へ提出せねばならぬが、経済の中心地は何んと言っても大阪であるから造幣局の設置を大阪にと、強く望まれた。一方国元では知藩事となった肥前守忠明は今三十五歳の男盛りであった。又家老の呼び名を大参事と呼び奉行の呼び名を少参事と呼ぶ、そして侍の名前は官職名が一切使われなくなり、官名の付いた名は全部改名させられた。例えば、右衛門、左衛門、右兵衛、兵衛、弾正、刑部、民部、治部、督、主計、主税、藏人等々の呼び名は禁止させられたので、当時の家臣名簿は権威も何も無い実にへんてこな名が着けられている、幼名や綽名又は通称何々とか平吉、留三、又市、など百姓と変りない名前が書かれてあり、全くお先き真暗の武士は自暴自棄で名を付けた有様が窺がえる、世の中の急速な変貌に侍達は不安な日々を送っていたのである。

尼崎藩領庄屋文書

森伊豆守様御領分

上牧谷村

久保寅夫

同所

一同五百四拾九人三分四厘

此扶持米式石七斗四升六合七勺

外ニ箕口関二ヶ所之分

右四ヶ村分

伊和組

元治元年

御普請願上帳

子十二月

上町村

一同人足三百八拾四人七分四厘

中町

此御扶持米式石九斗二升三合七勺

古井新井共繕ひ関両度分

本多肥後守様御領分

下牧谷

右之通り御上様より村々江兩井関

併ニ箕関人足御扶持方米被為成下

一人足五百六人式分七厘

此扶持米式石五斗三升壹合三勺

置候分如何ニ御座候

右割合

同所

古井之分

片山村

一人足式百廿九人九分九厘

内 百六十人九分九厘上町村
六十八人九分九厘中町村

同所

一同式百三拾九人三分四厘

此扶持米式石壹斗九升六合七勺

同所

下町村

一同百八拾五人四分七厘

内 百廿九人八分八厘上町村
五十五人六分五厘中町村

同所

一同五百五拾壹人壹分式厘

此扶持米式石七斗五升五合六勺

新井之分

一同式百八拾壹人九分式厘

内 百九拾七人三分四厘上町村
八十四人五分八厘中町村

同所

一同百四拾貳人八分貳厘

内 九拾九人九分七厘上町村
四拾貳人八分五厘中町村

新井溝筋より上町村の内惣田水落より横谷口迄八十間余之内土
手割ノ前筑人足

一人足七拾六分五厘

三箇村立会

内分

三拾五人三分三厘

下町村

此扶持米壹斗七升六合六勺

ノ三拾五人三分貳厘

内 廿四人七分三厘
拾人五分九厘

中町村

外ニ古井入用米代割合片山村へ渡し

一銀百四拾九分四厘

内 百四分三分三厘
四拾四分七分壹厘

上町村
中町村

新井入用米代割合下町渡し

一銀五百拾六分壹分貳厘

内 三百六拾壹分二分八厘上町村
百五拾四分八分四厘中町村

ノ外ニ箕口関人足割合

一人足百四拾九分六分

内 百四人七分貳厘
四拾四人八分八厘

上町村
中町村

ノ上町村之内横谷河土砂入取捨中町村境迄之内貳百間斗り之内土

手割ノ前築口々

一人足七拾九人貳分三厘

三箇村立会

内分 三拾五人貳分壹厘

此扶持米壹斗七升六合壹勺

四拾四人貳厘

内 三十人八分貳厘
拾三人貳分

上町村
中町村

上牧谷之内糸崎のり片山村迄之内貳百六拾三間

土手割ノ前築土砂取捨人足とも

一人足百拾六人八分二厘

六箇村立会

内分

貳拾貳人六分四厘

上牧谷

此扶持米壹斗一升三合貳勺

拾五人六分八厘

片山村

此扶持米七升八合四勺

拾七人四分貳厘

下牧谷村

此扶持米八升七合壹勺

廿四人四分壹厘

下町村

此扶持米壹斗貳升貳合壹勺

廿四人三分八厘

上町村

拾貳人貳分八厘

中町村

御他領分引残り

人足高合千五百五人七分九厘

銀二口合六百六拾五匁壹分六厘

内分

人足七百七拾式人七分七厘

銀四百六拾五匁六分壹厘

人足三百三拾三人貳分

銀百九拾九匁五分五厘

上町村

中町村

右者当子年御普請所御他領立会村々江
御上様より御扶持米御下ケ被為成下候
分相尋帳面に記置奉指上候何卒御勘弁
之上例年之通り被為御付被下置候ハハ
村中一同難有奉存候以上

元治元子年

十二月

上町村年寄 平七

庄屋 七右衛門

中町村庄屋 善吉

中嶋松治様

吉原佐賀八様

備考

伊沢川は、下流の四ヶ村上牧谷、片山、宇野（上町中町）、下町、下牧谷部落の灌漑用水であって、これらの部落の灌漑用水は古井堰、この堰は上牧谷の高橋の辺で、新井堰は上牧谷あがた橋の下流にある。

伊沢六ヶ村のうち本多氏の領地は下町、下牧谷、片山、上牧谷の一部尼ヶ崎藩松平氏の領地は上町、中町（現在宇野）で森氏の領地は上牧谷の一部が、古井堰に関係していた。

新井堰からは、上町、中町、下町の三ヶ村が灌漑用水を受けている。

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL②0036

春の研修旅行記

研修部 垣 口 正 信

今回の研修旅行は、従来からの方法を改め、郷土研究会は旅行を計画し、観光会社に一切をまかせて実施することになった最初の旅行であった。参加人員もバス二台九十名と限定して募集された関係上、また、申し込み期間が短かったことと、連休明けということにも起因してか、参加者は七十二名で、予定された定員に満たなかった。

一行は、五月九日(日)午前七時三十分神姫バス山崎待合所を出発し一路目的地へ向った。前日来の天気予報は低気圧の接近で、前線は、近畿南岸まで北上し雨の活動も活発になりこのため近畿地方は風雨が一時強く、ところにより雷を伴うとの気象台の発表であったが、予想に反し快晴に恵まれ、回廊中国自動車道を心地よく走り、沿道には萌黄色の若葉に包まれ、ところどころに彩もあざやかなさつきが今を盛りと咲き誇り、この美しい爽やかな景色を窓外に眺めながらバスは走る。

途中、赤松PAでトイレ休憩をとり、吹田より近畿自動車を経由して、西名坂自動車道へと進む。日曜日早朝であったことと、大型トラックが少なかつた関係上、渋滞するところもなく、懸念された松原JCも車は流れる如く走り、香芝ICへは山崎を出発して

から約二時間余で到着し、ここより一般国道へ出て最初の目的地である当麻寺へ向ったが、大型バスの進入出来ない道路があつて止むを得ず国道一六五号から大和高田市に入り、更に、一六六号へと迂回しながら走り、この間思わぬ時間を費し、漸く近鉄南大阪線当麻駅前前十時三十分到着する。しかし、大型車の駐車場がないため、当麻寺へ約一、〇〇〇米余りの参道へ続く道を歩くことになった。

ここ当麻は、奈良盆地の南西部二上山麓にあり、大和の国と河内の国を結ぶ古代交通の要衝であつた処、一行は初夏の陽を浴び、歩く道は遠くて暑く汗ばむ程で、殊にお年寄りにはお気の毒であつた。

途中、道端に相撲館があり、大相撲花形力士の写真や似顔絵が掲げてある。その隣には、当麻速の塚があり、日本書記にある伝説によると、速は垂仁朝時代の力士といわれ強力を誇り、力競べを望む者あれば死生を期せず争わんと豪語していたが、天皇は出雲の国



から野見宿禰を召され、相撲をとらせたとこゝろ蹶速は宿禰に脇骨を踏み折られ、またその腰を踏み折られて敗れてしまったという。これが相撲の起源といわれている。

山門が近づくと新緑に包まれた中に三重の塔が見えてくる。参道の両側には土産物や飲食店が軒を連ねて賑わっている。

この当麻寺は、天武朝創建と伝えられ、奈良時代の建築であると聞く。寺内には、中將姫の当麻曼陀羅、天平時代の東西両塔、日本最古の白鳳時代の梵鐘や石灯籠など、国宝、重要文化財が数多く、当時の人々の信仰の厚さが伺われる。折角の機会でもあり、特別拝観料を払って本堂、講堂、金堂、奥の院を観て廻る。また、この寺は牡丹の名所、花の寺としても名高く、数千株の花が四月下旬より五月上旬にかけて色とりどりの艶姿を誇り妍を競いあうといわれるが、生憎この度はやや花の盛りも過ぎ期待はずれの感があったが、さすがに見事な庭園であった。

当麻寺を十一時三十分出発する予定のところ、バス待ち合せ場所の変更が全員に充分周知されていなかったのか、集合時刻になっても一名の方が来られなく、添乗員谷林氏や顔見知りの方々が探しに行かれ、心配したが幸い無事に発見されて一同やれやれと安堵した。

しかしこのことにより、四十五分ほどの遅れとなり次の目的地壺阪寺へ向った。国道二十四号から一六九号を吉野方面に南下し、橿原市を過ぎると左に西国霊場七番札所岡寺、明日香村高松

塚の方向を遙かに眺めながら、大和の薬で名高い高取町へと入り、壺阪寺へは、十二時五十分に着いた。早速食事をとり、一時三十分から二時三十分までの一時間寺を拝観する。この頃から空が曇り始め、小雨がぱらつく天候となったが、さほど雨も降らず参詣に支障を来すようなことはなかった。

壺阪寺は西国霊場六番札所で、大宝元年辯基上人によって開創された古刹で、ご本尊十一面千手観世音菩薩は、眼病に霊験あらたかでご利益があると伝えられ、多くの人達の信仰をあつめている。殊に有名なのは、「壺阪霊験記」で盲人の沢市と妻お里の夫婦愛の物語は、浄瑠璃、文楽、浪曲等により上演されて、中でも浪花亭綾太郎による「夫は妻をいたわりつ、妻は夫に慕いつつ」というくだりは、昭和初期の浪曲界の立役者で、私も子供の頃良く聴き、口づさんだもので昔をなつかしく思い出す。また、この寺は印度におけるハンセン氏病救済活動の縁から、日印石彫文化事業の一つとして、



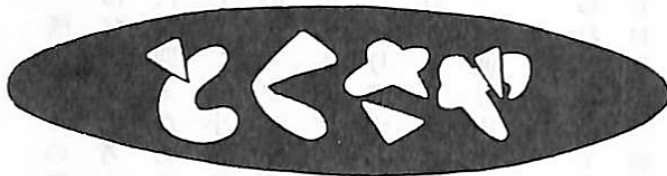
大観音像や大石堂が建てられ一つの名所ともなっている。
壺阪寺での買物は矢張り目薬で「サワイチ目薬」を買い老母への土産とする。

帰路は、樫原市にある県立考古博物館へ寄る。さすが、奈良県は古代大和文化の中心をなした地でもあり、遺跡の出土品など文化遺産が数多く発掘展示されており、考古学古代史の研究に大きく役立てられている。

ここ博物館を三時四十分に出発し、道中大きな渋滞もなく予定の時刻午後七時少し前に山崎へ無事に帰着することができた。

今回の旅行を顧みて、実
施主催者が代って始めて
の試みで、会員の方々には
非常にご迷惑をお掛けした
ことと思われ、反省させら
れる点多かった。しかし、
その反面利点もあり、これ
を契機として、今後更によ
り充実した研修旅行にしな
ければならないと考えるも
のである。

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)
☎(0790)62-1680代

与位高尾遺跡の発掘

山崎町与位地区において、町が実施する神野地区(与位)農村基盤総合整備事業が計画されていたため、町教育委員会では、昨年十月より埋蔵文化財発掘調査を実施していた。

工事予定約五、五haのなかに二×二mグリッドを四十箇所設定した。今回遺跡が確認されたのは、その南東部分の約千五百㎡である。現地は、前面に揖保川の支流である高尾川を、背後に通称「丸山」を配する北東向きの狭小な緩斜面で、「丸山」から張り出す尾根の北東端に位置する。

標高は、約一三六、七mから一三七、一mの水田で、現地表下約三十mから四十cmにおいて確認された。

確認された遺構は、出土した遺物から縄文時代中期末から後期初頭(約四千年前)の竪穴式住居跡一棟とその周辺で火を焚いた痕跡などである。

竪穴式住居跡は、残存部分で約四、五mあり、形は残存部分からははっきりしたことは言えないが、隅丸方形もしくは円形である。

ほぼ中央には四方を石で囲った約七十cm・深さ十五cmの石囲炉をもつ。主柱穴は石囲炉に並行して二穴で、西側の柱穴は直径約四十cm・深さ約四十cm、東側の柱穴は直径約四十cm・深さ四七cmで、

主柱穴間は、約二mを計る。

また、西側壁面に沿って縦約一、七m・横約一mの集石土壇が確認され、貯蔵穴として利用されたのではないかと考えられる。

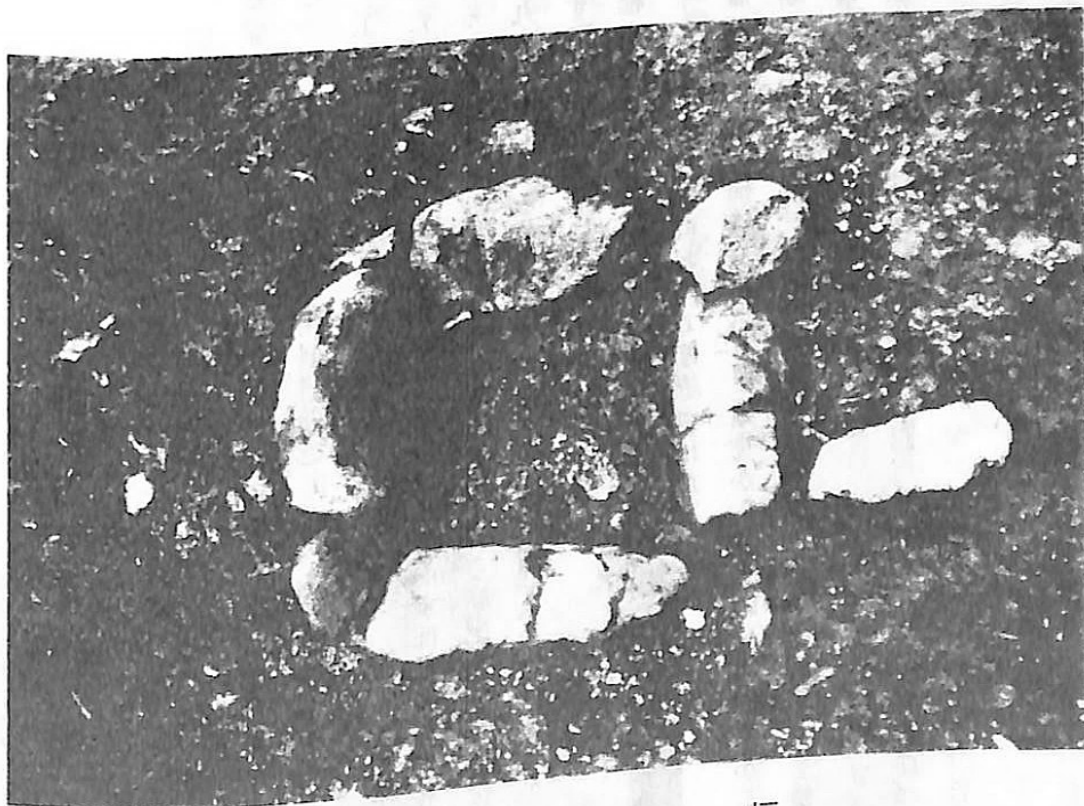
住居跡内から出土した遺物は、縄文時代中期末から後期初頭の深鉢をはじめ、石鎌（せきぞく・石のやじり）・小型の定角式磨製石斧（せきふ）・石匙（いしさじ・石のナイフ）・石錘（せきすい・石のきり）・石錘（せきすい・石のおもり）・敲石（たたきいし）・磨石（みがきいし・たたいたりすり潰す石）・石皿（石の作業台）、あるいはこれらの石器の作りかすである石片や石核等も出土し、当時の生活に必要なものは、一通り出土している。また、炭化した木の実も出土している。

また、この近くでは隠岐島等のごく限られた場所ではか産出しない「黒曜石」の鎌や石片も多数出土しており、当時の「ものの動き」という観点からも極めて貴重な資料を得ることができた。

山崎町では、これまでに発掘調査によって確認された縄文時代の遺跡は二、三例しかなく、今回の調査で得た資料は、周辺の同時期の遺跡と比較研究するための貴重な資料であると考えられる。これまでに、この時期の住居跡が確認されている遺跡としては、揖保川流域では穴栗郡一宮町の福野遺跡・森添遺跡、龍野市の片吹遺跡・清水遺跡などがある。今回与位高尾遺跡で出土した土器は、片吹遺跡から出土したものとよく似ている。

遺跡は、兵庫県教育委員会・山崎町教育委員会・山崎町役場農業土木課の協議の上、当初の設計を変更して、砂で埋め戻して保

存することとなった。



（山崎町教育委員会提供）

石 罫 炉

事務局だより

永年山崎郷土研究会の指導者として会報の巻頭に毎回ご寄稿を願っており
ました、島田清先生が去る六月二十日ご病氣のため急逝されました。

お知らせと共に心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りしたいと思います。

島田清先生略歴

昭和六年 姫路師範学校卒。のち文検合格。県立山崎高等女学校教諭

同十二年 学制改革により県立山崎高等学校教諭

同二十四年 兵庫県教育委員会社会教育主事

同三十三年 同 文化係長

同三十九年 新設兵庫県文化資料室主任

同四十五年 兵庫県立教育研修所次長

〔註〕昭和二十七年 博物館法公布 同年、同法規定の学芸員資格取得

元姫路学院女子短期大学教授

神戸史談会副会長

財団法人のじぎく文化財保護研究財団理事

※秋の研修旅行は、前回同様神姫観光への申し込みとなります。